

東丘織道案內





春月平泉兄と共に

院史料も見い片し付

4326

東上鐵道案内

目次

東上鐵道沿革	(一)
運輸と生産力	(二)
重なる物産	(五)
重なる輸入物貨	(八)
新河岸川の現状	(九)
入間川の鮎漁	(一六)
沿線の狩獵地	(一八)
名勝案内	
池袋驛	(三)
△雜司ヶ谷鬼子母神△千投銀杏△威光天 △池袋太神宮△龜龜の松△開口芭蕉庵△ 馬琴の墓	
下板橋驛	(二七)

△板橋氏墓△加賀屋敷跡△近藤勇の墓△
平塚城趾△瀧の川△飛鳥山

上板橋驛 (四〇)

△穴守辨天△御殿跡△金乗院△安養院△
三國傳來の釋迦

成増驛 (四二)

△吹上觀音△松月院△赤塚城趾△諏訪神
社△德丸原△白子不動の瀧

膝折驛 (四三)

△中山邸跡△平林寺△栗平塚△岡村の館
△平澤觀音△氷川の瀧△不動の瀧△

志木驛 (四四)

△數島神社△館の趾△寶幢寺△志木河岸
△伊呂波樋△大和田町

鶴瀬驛 (四六)

△諏訪神社△辨天の瀧△篠名權現△貝塚山
△南畑城趾△富の地蔵△柳瀬城趾

上福閣驛

△天神教會本部△樂王寺水天宮△長宮氷
川神社△古尾谷八幡宮△堀兼の井

新河岸驛

△新河岸觀音△諏訪右馬之亮典趾△愛宕
神社△雨塘坂△藤間諏訪神社

川越西町驛

川越町驛

△川越の沿革△川越の實業機關△川越各
學校△川越城跡△三芳野神社△霧吹の井
△氷川神社△浮島稻荷△烏山神社△六塚
稻荷△蓮華寺△東明寺△養壽院△妙養寺
△本行寺△見立寺△徂徠屋敷△札の辻古
戰場△唯心庵△伊佐沼の勝景△東照宮

田面澤驛

△入間川鮎漁場△常樂寺△日枝神社△大
智寺

(四)

(三)

(五)

(五)

(六)

喜多院

△小仙波の由來△喜多院の緣起△喜多院
の靈驗△天海上人の興業△星岳保勝會

喜多院境内の名蹟

△大師堂△開山堂△記念塔△客殿△五百
羅漢△經藏△明星杉及明星井△三位稻荷
喜多院の寶物

△國寶の梵鐘△稱代の銘刀△國寶の職人
電

表紙意匠及び名所圖

挿入寫眞

八幡白帆筆

二十五圖

(六)

(七)

(七)

池袋停車場

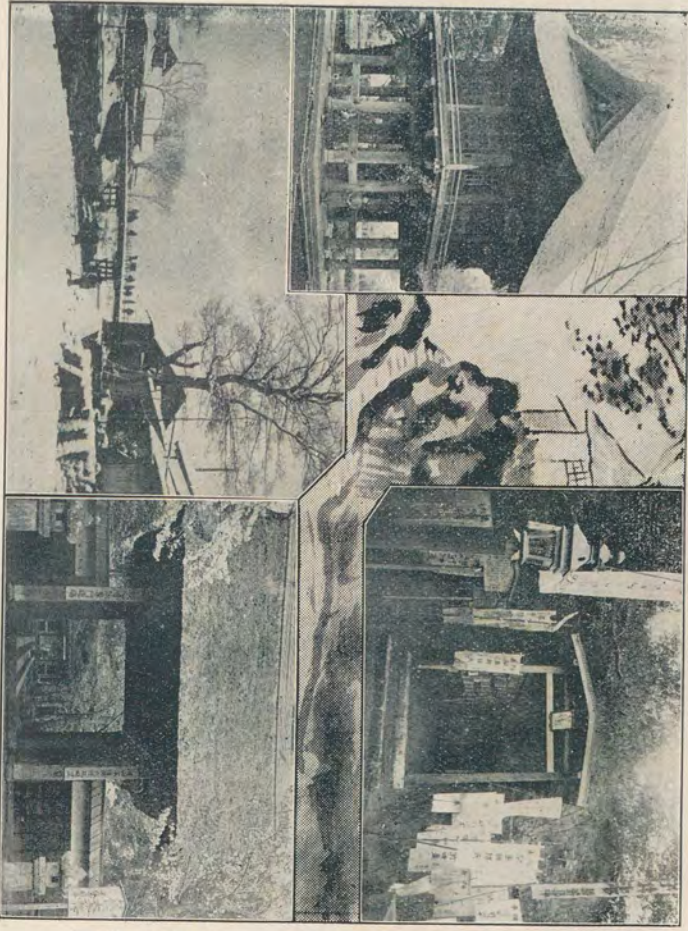
神學院

白子不動の瀧



池袋太神宮

平林寺山門



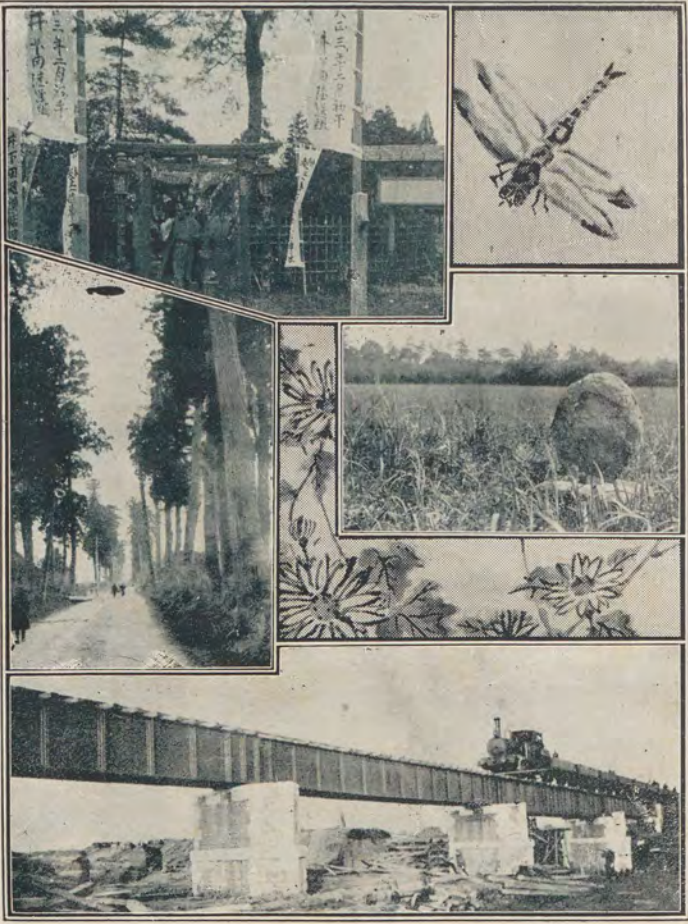
上板橋次守樂天

平林寺總門

岸河木志の雪

業平塚

柳瀬川鐵橋

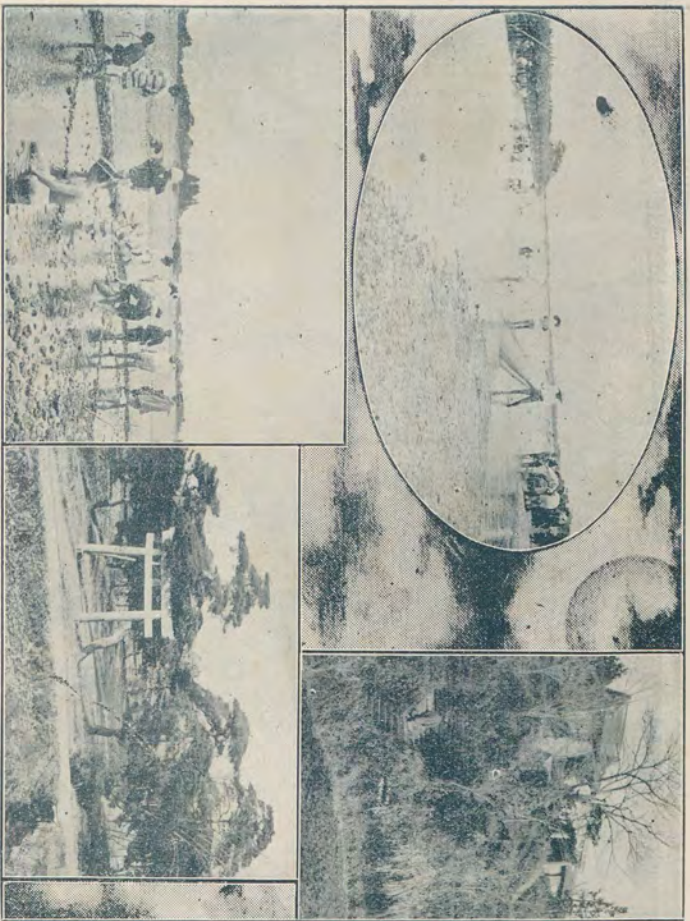


東上稻荷

うたう坂

田面澤站源

同上



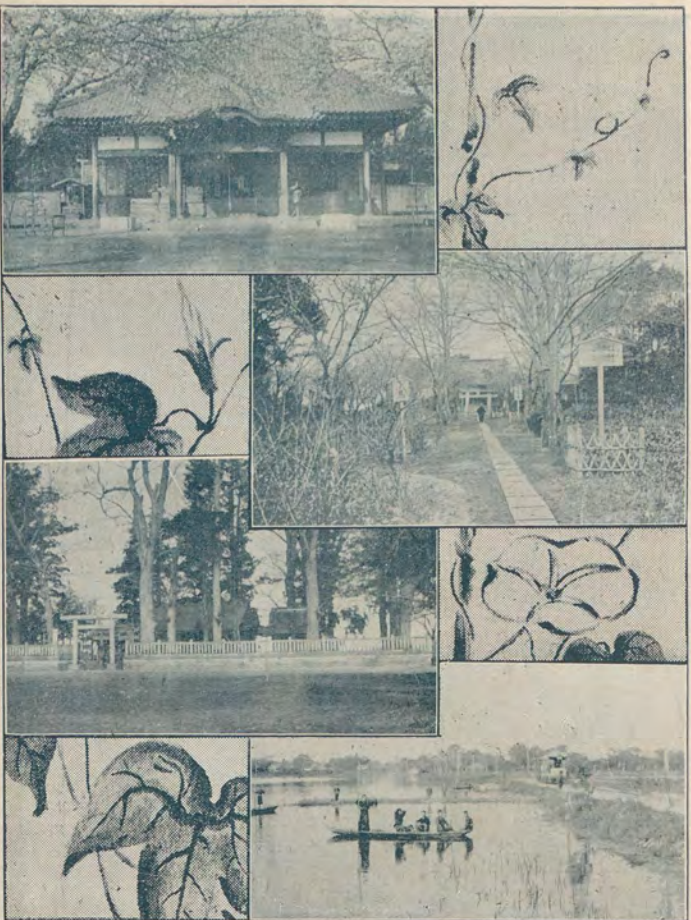
川起富士見橋

川越浮島神社

— (4) —

三芳野神社

伊佐沼の舟遊



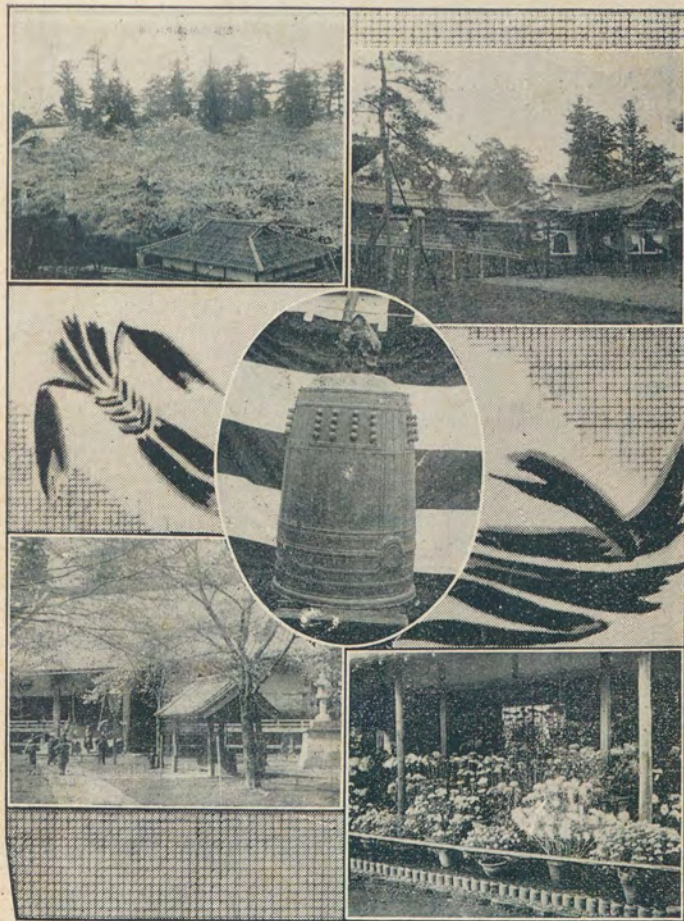
川越蓮聲寺

川越氷川神社

— (5) —



喜多院全景



川越喜多院支關

喜多院國寶梵鐘

喜多院境内百花園の菊

喜多院本堂前の櫻



序

紫の一もゆゑにさ歌へりし昔はしらす、名にし負ふ大武藏野を、眞一
文字に貫通する東上線の道中双六、その振出しの池袋、袋の中の寶
探しは賽の目に盛る停車場の數々一汽車遅れて下車驛に旅のつれづれ慰
むる名所舊蹟も少からず、お茶聞し召せ、御休憩所旅館の評判から、
窓の呼賣名産しらべ、御手紙ながら双子橋の織目正しき案内記、一度此線
に遊ばん輩、一本を手にし給はば興趣更に深かるべしと稽首謹て序す。

葉 月

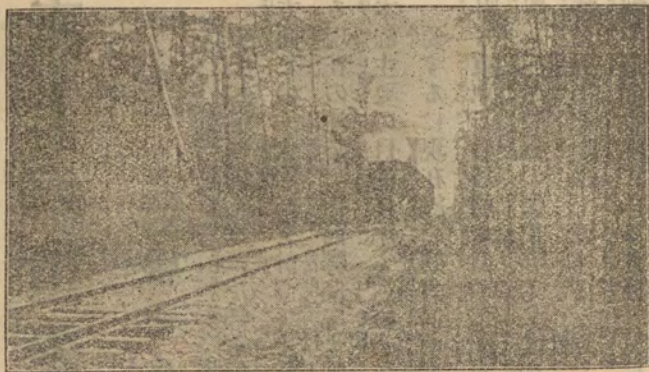
金 井 紫 雲

□東上鐵道の開通は名勝古蹟饒かなる中部の地に曳鉦の士を愈々多からしめたり。されど未だ之が案内の乗と見るべきものなきを以て此小冊子を出す事となり。

□史蹟は古書に據り又は里人に訊れて詳かにせるも猶誤なきを保せず、大方の示教を請ひ再版に於て之を改むべし。

□本誌上梓にあたり沿線各位の御盡力を忝ふせしもの渺からず。特に淵本龜藏、若山三藏、藤田雄二、松尾隈一の諸氏並びに喜多院遠賀亮中師の御後援を賜はりし事は編者の銘記して忘る能はざる所なり。

編者白



東上鐵道は東京市小石川區大塚辻町を起點とし帝國鐵道山手線を横斷し板橋町より埼玉縣川越町を経て上武鐵道に連絡し、群馬縣藤岡町を経て高崎市より澁川町に達する線路延長百數哩の鐵道を布設し上武の富源開拓を目的とし、資本金四百五十萬圓を以て明治四十四年十一月の創立に係る、大正元年十一月工事認可と共に起工に著手し大正三年五月を以て其の第一期線たる池袋、田面澤間は開通の運びに至つた。現在線路延長機かに二十數哩に過ぎないが東上方面交通運輸機關の第一階梯として矚目され、同時に近く實施さるべき第二期延長線は沿道一般の人々から大いに其の速成を期待せられつゝある。

東上鐵道案内

運輸と生産力

東上鐵道は即ち武藏中部を縦貫して、群馬縣澁川町に達せしめ、直に東都と上信越方面との一大連絡を計つて上武の富源開拓の使命を帯びて居る、固より其第一期線たる現在の池袋、田面驛間二十哩餘の區間は未だ以て豫定事業の半にも達せず、從つて本線主要の目的に添ふ所極めて尠少である。

要するに現在線の効力は中武經濟機關の中樞機軸として亦沿道隨一の主都たる川越町と東京との連絡に依つて此を圍繞する入間、北足立、比企等の隣接關係郡部地方に對し生産物貨の搬出移入に其の輸送力を傾注する事である即ち本線沿道の產物として特に聲價を現はしたものを舉ぐれば先づ其の名天下に籍甚する川越芋を第一として三郡平野の收納に係る米麥、入間郡北部產出の木材、薪炭、製茶入間川產の砂利等は最

も集散の多額を占むる主要なるものである、更に近年川越地方に注入された工業力は漸時工場の施設、機關の完備等に依つて發展し產額も年歲増加を示した中にも繭、生糸、織物、簞笥等の取引は愈々隆盛の域に進まんとして居る。

而して東上線開通前に於ける物貨集散の輸送力としては仙波河岸、新河岸、福岡、志本等を通ずる新河岸川の水運あり、川越鐵道、川越電車等があつたが本線開通後中央方面との距離、時間並びに賃金の大短縮大節減は俄かに中武方面の生産界に一大便益を與へ從來如上の各輸送力に委ねられた一般の貨物は一に本線に依り搬出移入の途を講ぜらるゝに至つたのである。蓋し東上線の開通が中武開發の一大動力となり生産界に大覺醒を與へた事は的確なる事實である。

自三年五月
至四年三月
輸送統計

乗車客
三九、四三三

降車客
三、七〇一

輸出貨物
八、五三三

輸入貨物
九、六〇九

賃金
八、三五、九〇

以上の如く東上線が開通後日尙淺きに關らず此の隆盛なる狀況を示すに至り、一箇年優に六十餘萬の旅客を運び二十萬噸の物貨を輸送する事となつた其の半面に於て從

來殆んど中武地方運輸機關の覇權を握つて居たかの如き新河岸川の水運或は川越鐵道川越電車等の輸送力に一大影響を及ぼし殊に著しく新河岸川の水運業をして衰凋を呈せしむるに至つた事實が秘んで居る。要するに中武の生産地を京濱地方の需要者との連絡を計ると云ふ點に於て本線と新河岸川の水運等は共に顧客を同ふし、而も鐵道の至便は川船の遙かに遠く及ばざる所で早晩斯かる結果を生ずる事は何人も豫測し得る所である。

されど永年の習慣性に依り未だ一部の生産業者が水運によりて、物資の搬出移入を行ひ、統計上鐵道の輸送高より遙かに以上の超過を示してゐるものがあるのは、蓋し新河岸川が依然今日も舊觀を留めて舟楫の運輸に便せられて居る所以である。輸出品に於ては木材、薪炭、雜品、輸入品に於ては肥料、石材、雜貨等を最も然りとする。現に川越町驛一月以降四月迄の輸送統計輸出二千二百廿噸輸入五百三十一噸に對し仙波河岸の輸送統計は輸出八千五十噸輸入五千二百七十噸で明かに輸出入共彼が優勢を示してゐる。依つて本線沿道に於ける眞の生産搬出、物貨需給の狀態を知らんと欲する

ならば先づ新河岸川の現況を究むる必要がある。

重なる物産

本線沿道に於ける重なる生産販出物は米穀、甘藷、製茶、繭、生絲、織物、工藝品、伸銅、砂利等で此が現況を左に紹介する。

米穀 沿線に直接關係を有する入間、比企、北足立三郡の米穀の産出額は米約三十七萬石、麥約五十三萬石で此内約半額は川越町に於て集散せられる、而して其販出先は東京を始め、西武及甲州地方で米穀の取引は川越町商業の重要な部分を占めてゐる。

甘藷 天下に聲價を博して居る川越芋の最近一箇年の生産額は實に一千二百八十萬貫其價格八十五萬圓に達し川越、新河岸、福岡、志木等の各地より大約八百萬貫の集散を見る重なる仕向地は東京及び甲信、神奈川地方である。

製茶 狹山、豐岡地方より川越町に亘る一帯の地より産する所謂狹山の茶は

一箇年の産額二十二萬貫價格五十萬圓に上り横濱、東京、信州、上州方面へ川越町を通じて搬出さるゝもの五七萬貫に達してゐる。

繭 縣下本庄町地方に續きて産出多く川越町に於て集散せらるゝもの一箇年約二十數萬貫に及び盛蠶期に及ぶと上信地方の製絲家は續々入込んで盛んに取引される生絲 入間郡の生絲産額は一箇年四萬貫價格百七十萬圓にして横濱方面へ向け輸送される。

織物 川越織物は染織學校及び圖案調製所等の設立ありて當業者の指導獎勵に依り近年長足なる進歩發達を遂げ、更に織物組合、織物市場の開設あつて取引の改善販路の擴張を得、今や絹織物、綿織物及び絹綿交織物等有らゆる織物の種類を網羅し最近一箇年入間郡下の産額三百六十萬反に上り關東屈指の織物産地となつた、而して生産品の大部分は東京、横濱、甲信、千葉方面へ向け搬出する。

砂利 入間川の砂利は諸種の土木建築に使用し良質なるを以て近時漸く聲價を現はし搬出高を激増した、東上線開通と同時に松田商會や遠藤組其他は終點田面澤

附近に採取場を設け頗る大規模なる採取事業を行つてゐるが一箇年の生産額五萬噸以上及び東上線に依つて京濱方面へ盛んに輸出されつゝある。因に東上鐵道武藏野鐵道等の線路は悉く入間川採取の砂利を使用したのである。

伸銅 膝折村の伸銅事業は近年益々發展の域に進み機械の改善、工場の擴張等に依つて産額を激増した、現在工場十五箇所にて一箇年の製造額銅線九萬三千六十貫價格十九萬八千九百二十圓眞鍮線九萬四千四百四十貫價格十八萬五千五百三十八圓鐵線八萬四千貫價格三萬四千四百四十圓其他の線及異形品四萬六千六百貫價格八萬七千五百圓合計三十一萬五千四百貫此の價格五十萬六千二百九十八圓を算して居る。重なる産出先は東京方面で殊に産額の大部分が官需品となつてゐる。

麥粉 膝折村が沿道隨一の生産地で三十五箇所の製粉工場より年産額六百五十二萬七千二百五十斤此の價格四十二萬二千九百四十圓の多額を算して居る。概して京濱各地へ販出されるが原料品たる麥は此の地方一帯が主産地でありて殆んど無盡藏であるか、今後益々斯業の發展は期待されつゝある。

重なる輸入物貨

沿線に於ける輸入物貨の到着地としては、川越を最とし、其他は特筆すべきものは甚だ少い。川越地方は近年織物其他の製作工業が著しく發達した結果として其の原動力たる石炭の需要が増加した。又附近一帯の農業地へ供給すべき肥料の集散は依然として盛んである。其他の輸入品としては建築用の石材、煉瓦が重なるもので諸雜貨又莫大の額に達してゐる。

石炭 川越地方に於ける工場數現在九十箇所の中石炭の動力に因るものは其の三分の一で鐵道、舟運、電車等に依る一箇年の輸入額が一萬二千四百廿噸價格十萬九千七百圓を算して居る。供給地は主として常磐地方で從來川越鐵道、川越電車等に依つて運搬せられたものだが東上線の開通以來は運輸の諸關係最も至便を極むるを以て一に本線に依る事となつたのである。

肥料

川越町から供給される肥料の需要地は入間、比企兩郡地方で一箇年の

供給額一萬二千九百四十三噸に及び種類は糠、鰯糟、油糟、大豆糟、過酸燐、糖等である。運輸は現在鐵道に依るものと新河岸川の舟楫に依るものと殆んど相半し重なる仕立地は東京、滿洲、北海道等である。

石材及雜貨

石材の輸入額は一箇年三千六百五十六噸雜貨の輸入額は三千六百噸で重に供給地は京濱地方である。

新河岸川の現状

由來新河岸川は仙波、新河岸、上福岡、志木、根岸其他沿岸數箇所に根據をなせる同漕業者に依つて支配され、川越地方と東京方面の水運に關しては古い沿革を有して居る。既往數年交通の不便なりし頃新河岸川は數百艘の船舶が盛んに航行して東京仙波河岸間を往復し貨物の運搬は勿論一般旅客の乗用に供されて居た。即ち新河岸川全盛の時代に現に明治四十年前後迄は此の隆昌なる状態を持續し、一箇年僅に價格三百五十萬圓の生産物貨を運搬し運賃總額十數萬圓を算した、後ち川越電車、川越鐵道等の

創立發展に伴ひ水運に因る物貨の移出入を減少する傾向を呈してゐたが、昨年東上鐵道開通して京濱方面との輸送機關が完備するや更に一層輸送力を減殺された観がある

水運業の衰微 要するに東上線の開通は新河岸川水運業の致命傷とも云ふべきもので急激なる此一の大打撃に依つて沿岸各河岸の現狀は殆んど衰微の極に達した。尙聞く所に依ると内務省今次の荒川改修工事に伴ひ河身の變更を來し其の結果新河岸川の分水河口は著しく擴張される。従つて現在の緩流が俄かに水の流れを速進して急流と化するならば水源の湧水に乏しく水淺き新河岸川は滯水を減じて遂に舟楫の便を失ひ全く衰亡を來すべき一大懸念を生じた。目下沿岸各地に於ては寄々此が善後策に汲々たる有様であるが就にせよ新河岸川の水運復興は今日既に頗る至難の狀態に陥つた事は明かである。

數字上の現狀 而して現在新河岸川に於ける物貨輸送の實際高は何程あるか、統計上如何なる成績を收めつゝあるか、確實に而も極めて完全に此を知らんとするのは至難の事である。何となれば同川の水運事業は各個人經營に係り常に官衙會社の

如く統計機關が充分に備つて居ない。時に偶々杜選なる數字上の成績を表はす事は止むを得ない所である。今茲に比較的正確に近い各河岸最近一箇年間の輸送高を夫々特定の記號標準に依つて記して見る。

▲仙波河岸

(同漕業一戸、船舶九艘、取引先東京花川戸、深川、神田川、數字は各品目に依り個數計算にして斤量は不明なり)

輸 出		輸 入	
個 數	運 賃	個 數	運 賃
杉 角	一五、七九二	肥 料	一、三三三、四〇〇
板 類	三三、七三三	綠 糠	二九六、二〇〇
貫 戸	四、二二〇	鹽 類	九〇〇、二七〇
雨 類	二、三三〇	酒 類	四〇〇、九七〇
穀 類	一、二四五	醬 油	一、一〇〇、六〇〇
酒 類	八、四五六	陶 器	四七、八〇〇
醬 油	一、五五五	土 管	三三、五〇〇
茶 類	四一八	空 棧	三、〇四六
鑄 物	九、一〇四	繩 索	一、五五八
			八八、一三〇

反	柏	雜	榎	炭	松	杉	電	松	櫟	鑄	製	醬	酒	穀	雨	貫	板
	木					切		丸		物							
物	皮	貨			割	皮	柱	太	角	鑽	茶	油	類	類	戶	類	類

新^{しん}河^が岸^し

出

甘	一六、〇六〇	九五、四〇〇	七、〇〇四	四、八七二、〇一〇
計	九五〇、二一三	二八、四四六、七〇〇	四〇〇、八四五	三、六九七、四九〇
合				

▲志木河岸

(同漕業二月、船舶三十艘、取引先は東京花川戸、深川、神田川等なり左表は個數と斤量にして運賃は不明也)

輸 出		輸 入	
個數	斤量	個數	斤量
米	二、五五〇	雜穀	一、八五〇
麥	一、三〇〇	石	一、〇〇〇
雜穀	五、三〇〇	肥料	一、〇〇〇
甘藷	七三、九六五	木	八、五〇〇
雜貨	一、二、六九〇	食鹽	二、七五〇
大津土	六、五〇〇	木炭	六、五五〇
赤土	一、六五〇	石炭	二、四〇〇
合計	〇、六六六、三六	合計	三、〇二一、八〇六

▲福岡河岸

(同漕業三月、船舶十艘、各店の記入帳簿完備せず大約左表の如し)

(輸出) 穀物五、七六〇石、甘藷四三四、九四〇貫 雜物二四、三〇〇反、薏一五〇〇貫 茶二二〇貫、麥二三〇〇貫、家禽二二〇〇貫、生糸二五〇〇貫、
(輸入) 肥料二九〇貫 雜貨三、二八、七三貫

三社線の對比

東上鐵道、川越鐵道並びに川越電車以上三社に於ける大正三年川越驛旅客及貨物出入高の比較を示せば左の如くである。但し東上線は大正三年五月一日開業に付普通年度より營業日數に於て三十日の不足である又川越電車は全線の營業成績を示したものである。

	乗客	降客	輸出入	貨金合計
川越鐵道	五五、六八四	五、四四九	二、二八〇	一四、六三三、一三五
川越電氣	四三、〇七五	三、一七七	四、六〇六	二〇、六六六、六〇〇
東上鐵道	五九、八八	六、六六二	四、六〇六	一七、七三〇、九五

此表に示す如く最も新しい東上鐵道が、旅客數に於ても貨物取扱高に於ても收入に於ても好成績を収めて居るのである。

入間川の鮎漁

本線の終點驛田面澤は入間川畔の勝地に位し古來鮎の好漁地を以て目され六月一日の開禁を待つて毎年沿岸の地は鮎漁に非常の活況を呈する。殊に田面澤を中心として下流伊草、寺山附近より上流太田村境霞ヶ關に至る流域一里は緩流曲水河床數丁の間は玉砂利白く連つて最も鮎漁に適してゐる。

入間川の鮎

入間川の鮎は荒川産の鮎と共に夙に世に知られわけて、近來多摩川の鮎が年々濫漁に傾いて稍漁獲の減少を傳へられた折柄入間川方面は却つて年々豊漁に向ひ殊に武藏野の勝景を縦貫して入間川畔に達する東上鐵道が開通されてからは京濱地方に於ける嗜好者を迎ふるに至り。昨年開通以來は鮎狩が非常に増加し入間川の隆盛を見るに至つたのである、沿岸の鮎漁者は田面澤、山田、太田、霞ヶ關の各村を通じて百餘名に及び毎年解禁と同時に何れも競つて鮎漁獲に従事し、獲物は直に川越の魚商に販出され九月の盛漁季節になると一日に此の附近の漁師の手から三百枚乃至五百枚（一枚は即ち長さ八寸幅四寸に特定された鮎籠）を搬出さる。嗜好家の話に

依れば入間川の鮎は骨が柔かで極めて美味なるは遙かに多摩川の鮎を凌ぎ、從來縣下川越、浦和地方にのみ限られて居たものが東上線に依り東京地方の需要を見るに至つたのは特記すべき事實である。

鮎狩の設備

開通前迄は交通不便の爲め鮎狩の來遊客を満足せしむべき設備とは更に無く之が爲田面澤附近の好漁地は沿岸に於ける漁業者の手に獨占されてゐたが開通と共に營業事務所長淵本龜藏氏等の熱心な奔走に依り漸次來遊客歡待の方法を講じ、同村の舊家として鮎漁に深い經驗を有する宇津木辰五郎氏と協約し極力設備の完成に盡力された、其の結果會社では團體鮎狩に對しては天幕其他の諸器具を用意し主催の申込に應じて出來得る限りの便宜斡旋を計る事となつた。普通鮎漁の賃金として定められたものは網漁に本職四人助手二人を要し本職へ各一圓、助手へ五十錢宛即ち一網金五圓で優に一日の遊漁が出来る。尙本年から川越町の有志、沿道の有力者の發起で川越から割烹店の出店を設け種々新趣向の設備を凝らす事となつた。近く田面澤は地の利と人工とを相待つて、絶好の遊覽地鮎狩の好適地として呼ばれる事であ

らう。

鮎と時間

池袋驛から田面澤迄一時間餘、東京方面からの遊漁客は池袋發午前八時田面澤着同九時十分で、午後三時五十八分田面澤發同五時十一分池袋着の列車が最も好適で優に六時間餘の遊漁が出来る。其の外往復十八回の發着があるから時間の選擇は自由である。因に池袋から田面澤迄の汽車賃は特等五十九錢並等四十二錢で特に團體の旅客に對しては特定の割引がある。

沿線の狩獵地

(下車驛)

膝折、志木、鶴瀬、上福岡、新河岸、川越町、田面澤

(好獵地)

荒川沿岸、北足立郡内間木村附近、新河岸川、鶴瀬、福岡、高階、宗岡、新河岸、扇河岸、仙波、所澤飛行場裏山より東京府下北多摩郡瀬病々院裏山、新河岸より入間川町附近、入間川、下伊草附近、田面澤、川越伊佐沼

(獲物)

田嶋、山嶋、鴨、水鷄、鶉、鴉、山鳥、雉子、鳩、兎

著名の狩獵地

本線の終點田面澤附近は水清き入間川畔に位し鴉の名所として

世に知られて居る。又新河岸川は仙波附近愛宕神社の祠畔に生れ扇河岸、新河岸、福岡、鶴瀬、志木、根岸等の各沿岸を巡りて田圃莫々たる間を帶の如く流れ沿岸荻が生ひ茂つて水色滿々たる自然の水郷をなし水禽の棲息に適して居る。川越近傍伊佐沼もまた水禽の産地として名高い、古來此の附近一帯の地域は好獵地を以て矚目され、其昔將軍家或は旗本の遊獵地として盛んに涉獵されたもので、今も尙放鷹、卷狩等の遺蹟が各所に存してゐる。現に新河岸附近入間郡高階村寺尾の地には最近迄紀州大納言お鷹場の高札が残立してゐた。野面に點存する野守の小屋は即ち其時代雁や鴨の番をした番人小屋の名残である。殊に此の地域は東京市の郊外に隣接した武藏野の勝地を占め一日の閑遊に最も相應しく東上線開通以來は俄かに附近狩獵地の名各地に喧傳せられ獵友の來遊が頗る激増した。

新河岸方面

先づ本線沿道著名の獵地について鳥類繁殖の分布を見ると志木驛より東一里荒川の沿岸には鴉、鳩が多く、内間木田浦には田嶋、鴨が群をなして飛散する、荒川の分水地點より新河岸川を遡り鶴瀬、上福岡を経て新河岸より扇河岸に

名 勝 案 内

到る一條の水路には田嶋、鴨其他の水禽が白翼を連ね附近の景勝と相應じて頗る壯觀を呈する、晩秋から早春の盛獵季節になると新河岸から福岡に渉る二里四方の澤地に大鴨の群が下りて繪の如き奇景を呈する。

西北の林野

東上線を境とし西は東京府下北多摩郡瀬病々院裏山附近より所澤入間川町に至る數里の林野は古來著名な山嶋の棲息地で十月中旬から十一月下旬に亘り集合殊に夥しく、翼聲勇ましく群をなして林地を去來する。其外鳩、雉子、山鳥兔の類も甚だ多い此の附近へは志木、新河岸兩驛に下車するを最も便とする。

川越町近傍

川越町驛から東三十丁の伊佐沼は有名な狩獵地で、回周一里の沼畔には鴨、水鷄、鴨類が盛んに飛散し、風光佳絶なので遊覽旁々毎獵期には獵客で賑ひを呈する。入間川の沿岸下伊草より上流入間川に至る沿岸四里の流域には鶉が多く其他し水禽の繁殖し近年田面澤驛に下車する獵客が却々多くなつた。

池

袋

驛

(東京府北豊島郡集鳴村)

上野驛より
川越驛より

五哩五分
十九哩五分

賃金 二等
特等

五十四錢

三等

六
三十九錢

(連絡)

東北線大宮、赤羽方面、中央線新宿方面、東海道品川、東京驛方面、山手線上野方面及び武蔵野鐵道所澤飯能方面は當驛にて院線電車或は其線へ乗替へ。東京市内電車へ連絡は當驛より南へ八丁徒歩にて大塚、集鳴に至るを最も便す。

(名所)

雑司ヶ谷鬼下母神南五丁、池袋太神宮北五丁、目白不動南八丁、鶴龜の松南七丁餘、集鳴監獄東南五丁

『武蔵野は月に入るべき山もなし尾花が末にかゝる白雲』と續古今集にもある如く此あたりは一大荒原であつた、豊島太郎近義が豊島郡平塚に築城してより池袋附近の潺潺として流るゝ小川の邊に始めて人家の點々たるを見るに至つたのだと云ふ、今は東京郊外の閑靜なる地區をなし理想的の別荘地として弗々宏壯なる構へが建築され増々繁華の趣を呈して行く。本線の起點は院線池袋驛構内の北角に在り陸橋に依つて山の手線と連絡する。島型式の歩廊は一丁餘に亘り新設の待合室は陸橋に接續して

諸般の施設は完備して居る。一日上下十八回の列車は約四十五分毎に發着し、貨客常に充満して雜沓を呈して居る。本社營業事務所は西北隅に設置され、現在在は假設備であるが、近く本工事に着手する、筈。本線専用の池袋停車場も七月十五日より開設された。

各種の學校 池袋驛附近には各種の學校が存在して此地に學府の中心を築いて居る。觀がある東京府立豊島師範學校、成蹊實務學校は何れも驛より西一丁の所にある。成蹊實務學校は國文學者中村不盡の舍翁の息文學士中村春二氏の經營に係り、活きた學問を授けるのが校旨である。北方八丁巢鴨庚申塚には、明治女學校、東六丁巢鴨宮中には眞宗大學、東十二丁大塚窪町には高等師範學校、東京府女子師範學校が設立され、其他早稻田大學、東洋大學、東洋協會專門學校、日本女子大學等各々驛から二十丁以内に所在して居る。尚豊島師範學校後方に當る二萬坪の地積を劃して基督敎聖公會神學院がある、同院構内には明年五月迄に工費十五萬圓を以て立教大學校設立の計畫がある。

雜司谷鬼子母神 驛より南へ五丁、樹木鬱蒼たる靈域にある、四邊眺望佳絶、

四季の散策に適し、市郊外の淨地として逍遙がてらの賽客に賑ひを呈してゐる。堂は法明寺の一部分で、此寺は弘仁年間慈覺大師の開基に係り正嘉元年日蓮宗に屬した。東鑑に同寺を『源家數代の祈禱所となす』云々と記されてゐる。寺寶には光明皇后御筆の經文日蓮筆曼荼羅其他珍器什寶頗る多い。

子授銀杏 鬼子母神境内石の仁王尊の傍、亭々として聳ゆる銀杏樹は子授銀杏と稱し子の無い婦人が銀呆の樹皮若くは葉を肌に着くれば子を儲けると傳へられて居る。

威光天 鬼子母神堂の左二丁の所に仁王門がある。安置する仁王の像は名匠運慶の作と稱せられて居る。刀法の古雅掬すべきものがある。明法寺の奥に小なる鳥居が林立せる小祠は威光天と稱し、是ぞ源家數代の信仰措かなかつた稻荷社で今も尙參詣者踵を接するばかりである。

池袋太神宮 驛より西北四丁、豊島師範學校の裏手に當り麥圃相隔て、緑樹鬱蒼たる清淨の地積三千餘坪を開鑿して奉祠された。神德崇高なるを以て近時漸く世に聞え、東京市中は勿論遠近各地より參拜者相踵ぎ、將に京此の地に神嚴無比なる一勝を

加へた。抑も池袋太神宮は教長岸本可賀美氏が祭神佐田彦、大宮比爾太神の神勅に基き、明治三十二年以來前後十有七年間の修養を積み脱俗遷化の蘊蓄を極めて自ら神威顯體の理法に因り神祕の神通力を以て汎く信者に教義の施行傳道を行ふため莫大なる淨財を抛つて奉建されたものである。宏壯なる神苑は老木奇石の配置結構を極め

大日土御祖神、宇治神、産神、産土神、祓所神

等の神社を築き常に神明利益の祈禱を行ひ崇高なる神恵に浴せしめる。神苑の一角に設けられた徑一丈四尺、深さ四十尺の靈泉は教主が偉大なる神徳に因りて湧出せしめたものと傳へられ、實驗上清淨無比なる清泉が滾々として盡きない。而して教長岸本可賀美氏は神明の威徳を異體同心に實顯するため、専ら教化の任に當りつゝあるが、教長の神祕不可思議なる神通力は凡ゆる病毒禍根を立所に斷ち或は沙漠たる前途の大豫言を試み福祿壽命の印綬を授くる等其の自在力眞に驚ろくべきものがある。現に神勅の實蹟として教長は明治三十二年十一月十二日を以て

『今より十二年後朝鮮は併合せられ、十四年後に至り世界混亂の狀態となり其より引

續き五ヶ年間世界は大亂の世と化し特に其最後二ヶ年には我國民兵迄の必要を來して物心二界の大革命となるべし』

この大豫言を公表したが果して朝鮮併合、世界戰亂の二大事實は美事に適中し、赫々たる神威の耀輝を感せしめた。尙教長の指導に因りて難病平癒運氣恢復等其利益功驗著しく殊に毎朝夕世界大亂平定の大祈禱を行ひ、本社及神苑内に修養せる信者信仰の發達を期し大正八年を以て神世一之道宣教道場開設の目的を以て工事進行中である而も一度神徳を奉拜し靈泉の恵を受けて、利益に浴した信者は異口同音に神宮の尊き託宣を憶みて止まぬ。

目白不動尊 驛を距る南へ八丁、關口駒井町にあり。寺名を東豐山新長谷寺と呼び、眞言宗新義派大和長谷寺の末、元和四年の創立で、僧秀山の開基に係る、不動の本尊は弘法大師の作で、野州足利から移したものと稱され、荒澤不動又は臂切不動と號する。境内眺望佳く殊に雪の眺めは格別である。

鶴龜の松

驛の南約七丁、高田老松町細川侯爵別邸にある。二株の老松常磐の

色を湛えて樹容枝形の妙緻宛ら描いたものゝ如くである。老松町の名は此松から稱えられたもので、東郡四名松の随一の稱がある。

關口芭蕉庵 驛の南八丁、關口にある、名所圖繪に依れば昔上水開發の頃、芭蕉翁の此地に遊んだ事がある。後其蹟を失はん事を嘆き白兔園宗瑞及び馬光等俳諧師が此の地の光景が義仲寺に髣髴たるを以て『五月雨に隠れぬものよ瀬田の橋』と云ふ翁の短冊を塚に築き五月雨塚と稱したのである。

曲亭馬琴の墓 驛の南十六丁、小日向茗荷谷深光寺境内に在る。馬琴の八大傳中なる芳流閣は同寺を模したもので、馬琴筆の『芳流』の額面は今も猶存して居る。聖徳太子作觀音像、恵心僧都作如來像、馬琴筆春雨集等を寺寶とする。

巢鴨監獄 驛の東南五丁、巢鴨村巢鴨にある。重罪及輕罪囚を收容する所で、敷地六萬二千餘坪、建坪七千二百餘坪、繞らすに延長九百四十間の煉瓦塀を以てし檻房も亦煉瓦で疊んである。本監獄は元石川島にあつて石川監獄支署と稱し寛政二年の創設である現在の地に移轉したのは明治二十八年十二月で、總工費三十七萬五千圓を計

上して居る。

附近名所 驛の南十一丁目白臺には北村季吟別莊の蹟即ち疏義莊舊地がある。南六丁難司ヶ谷字清土には鬼子母神の尊像出現の地がある。其他南十丁神田上水なる大洗堰附近は花季の風光掬すべく、小日向水道端本法寺は達如上人の遺蹟で名高い。巢鴨宮仲の妙義神社、天祖神社、豊島岡又は豊島岡の儒者捨場等は附近に於ける重なる名所である。

下板橋驛 (東京府北豊島郡板橋町)

池袋驛より 一哩三 貨金 特等 三錢 並等 二錢
川越町驛より 十八哩二 貨金 特等 五十四錢 並等 三十七錢

(交通) 當驛より南五丁赤羽方面行鐵道院電車あり。板橋町北豊島郡役場へ三丁、東鴨町市内電車終點へ十八丁、乗合馬車の便あり(往復賃金十二錢)

(名所) 板橋氏の墓四丁、綠切板北三丁、瀧の川の紅葉東八丁、飛鳥山の櫻花東十丁

板橋は仲仙道の首驛で、慶長元和の交に及び初めて宿驛繼立をなしたものである。

板橋の名は此地を貫流する石神井川に架した橋の名から起つたものとも或は板橋氏の居住したるを以て地名に轉唱したのだとも稱されてゐる。府下四宿の一つでは北豊島郡の中樞機軸となつてゐる。郡役所、警察署、税務署、區裁判所出張所、陸軍火藥製造所等の官署を存し人家稠密、車馬絡驛として繁華な小都會を形造つて居る。下板橋驛は町の西北一丁餘の所に在り、院線板橋驛を東數丁の彼方に望む事が出来る。

板橋氏の墓 驛の東四丁の所、應永年間僧位豫無的和尙の開基と傳へらるゝ淨土宗乗運寺の境内の一角に青苔に包まれて残つてゐる、墓碑には本樹院殿信州空山有覽禪門と刻まれてある。

加賀屋敷跡 驛より七丁字金澤の地にある。徳川時代前田加賀守の屋敷として庭園の結構規模の壯麗を謳はれたが、今は田園林園と變じたやその地域の按配に依つて雄大なりし當時の佛を偲ぶのみである。附近に小字を浮田と呼ぶ所がある。浮田秀家の末裔が朝命に依り入丈島より召還されて居住した蹟である。

近藤勇の墓 驛の東四丁の田甫中に長き石の墓標がある。幕末の勇士として名を

知られし近藤勇が官軍の爲めに斬られた最期の地である。
平塚の城趾 驛の東十三丁瀧野川上中里平塚神社の附近がそれである。附近の蟬坂は攻坂の轉訛したもので尙角橋、外輪橋の小名が残つて居る。鎌倉大草紙に文明九年四月十三日太田道灌豊島平右衛門の平塚城を圍む云々とある。

附近名所 楓の名所瀧野川金剛寺は驛の東八丁、石神井川の清流を挾んだ數百株の楓樹が紅葉して錦風颯々たる晩秋の眺めは得も云はれぬ。また往時瀧野川氏の城砦を置かれたと云ふ櫻の名所飛鳥山も驛を距る十丁の所に在る。陽春の侯藩山の櫻樹萬朶の花を開き、爛熳たる花の霞を越へて荒川の清流、筑波の紫峰を望む、飛鳥山に相對した王子權現社には老樹茂り麓には音無川が流れて自ら一幅の繪巻物をなしてゐる

驛の西北十丁練馬街道筋に設立された東京養育院附屬の分院は大正二年中に建設されたもので建物全部の用材は明治天皇陛下の御大葬を行はせられた青山の葬場殿の御用材を細民救護の思召を以て宮内省より其儘下賜せられたものである。

上板橋驛

(東京府下北豊島郡上板橋村)

池袋驛より
川越町驛より

三哩八分
十五哩七分

賃金
特等

八錢
四十八錢

並等

三十二錢

(交通) 川越街道へ一丁、武蔵野鐵道練馬驛は當驛より約一里練馬にあり、練馬の宿へは北西三丁餘

(名所) 新發見穴守辨天西十丁餘、金栗院西八丁、安養院南八丁

(名物) 武蔵野漬、練馬大根

上板橋村は川越街道の首驛である、古は宿驛繼立をしたが後廢せられた、元は下板橋と合せて一村であつたが天正以後に於て分離せられたものである。停車場は練馬寄の川越街道に近接して設けられた。構内には櫻樹數十株を植えて頗る風致を添えてゐる。此附近一帯の地は夫の有名な練馬大根の産地で、晩夏の候大根收穫の季節になると一望四邊は大根の天地と化して白い籬を結んだ如く頗る奇觀を呈する。

穴守辨天 停車場を距る西六丁の下練馬今神なる圓明院内に發見された土窟で目下考古學者間の問題となつて居る。發見されたのは大正四年三月二十一日で村民が土取をなしたつゝある間に偶然にも右の土窟を掘り當てたのである。土窟は高さ一間餘方

一間に餘り、四壁を形作るに八葉の蓮華を以てして居る。土窟の中から辨財天の像と文龜元年四月三日の文字とを刻せる石片と賢榮阿闍梨云々と刻せる石片が現はれた、此に依つて始めて開基不明に屬して居た眞言宗慧日山圓明院の開祖賢榮阿闍梨の入定の跡と云ふ事が明かに按せられた。土窟の形狀が從來發見された幾多のと其趣を異にして居るので考古學者は好個の研究資料だと云つて居る。殊に此土窟を發見した村民某の娘は當時瀕死の病人であつたが土窟發見と共にさしもの難病が平癒したとの事が、頻りに傳へられて靈驗顯著なりと信仰する者多く發見僅かに一箇月餘りにして俄かに參詣者を生じ、一日數千人を算し遠く東京横濱川越八王子等から詣づる者が續々として盡きぬ。爲めに今迄靜寂を極めた境内には俄かに露店が櫛比し門前市をなすの盛況を呈するに至つた。發見の緣起に因んで毎月三日と二十一日を緣日と定め當日は穴守辨財天の御開帳を行ふ事となつたのである。

御殿跡 圓明院の西北三丁、石神井川支流に臨んだ一帯の地を御殿跡と稱して居る。四隣廣活田圃の眺め美しく都人士の目を樂しましむる事限りない。徳川五代將軍

綱吉が未だ右馬頭であつた頃宿禰に惱み、一陰陽師の占に右馬頭の文字に因ある地を選んで轉地をすれば治癒疑ひなしとの事で、下練馬に邸を建て、其處に移る事となつた、當時之を練馬御殿と稱へたのである。延寶八年四代將軍家綱薨じて江戸に歸る事となり綱吉は殿舎を村内金乗院の住職に賜はつた、即ち御殿跡の名の起源である。

金乗院 驛より八丁、如意山滿德寺と號し圓明院の西北三丁石神井川支流の右岸に在る。老杉森として境内は幽雅である。文祿年中僧行榮が一小庵室を取擧げて堂宇を建立した金乗院と號したのは慶安二年である三代將軍家光が鷹狩の砌驟雨に遭ひ此寺に入つて雨宿をした。當時寺僧の希望に依り褒美として下練馬一村の寺院を悉く眞言宗に列せしめ御朱印地を賜はつた、後に綱吉から賜つた練馬御殿の用材で本堂を改築したが文久元年祝融の災に罹つて堂宇は悉く烏有に歸した。現在の堂宇は其後の建立である。

安養院 驛より七丁、川越街道の南方に當る小丘上を劃して建立され、境内廣く眺望絶佳である。往昔北條時頼が諸國行脚の折偶此丘に憩ふて四隣の清き風光を賞

で、懷中して居た守本尊の摩利支天像を本尊として堂宇を建立した、即ち安養院の開基である、山號を武王山最明寺と云ふ。

三國傳來の釋迦 安養院の所藏に係り毘首羯摩の作である。鎌倉北條家の寄進にかゝはり頗る稀代の珍什で、手法の妙致は美術家が好個の參考資料とするに足る。尙同院には他にも北條家累代の寄進とする名什數多を藏したが明治初年倉庫に火を失して大部分を烏有に歸せしめたとの事である。

其他の附近名所 氷川神社は驛より九丁、幽邃の域をなしてゐる。北十二丁なる志村字城山は千葉氏の城趾で今は千草が生茂り、葉末に鳴く蟲の聲にも在りし昔が偲ばれる。昔荒川の流れが入江をなしてゐた云ふ小豆澤畔の薬王山龍福寺は東北十四丁、熊野神社は北十二丁の所にある、何れも上板橋驛附近の各所として郊外散策の好適地に數へられてゐる。又六百年前の遺跡として名高い上練馬田柄の立場花見堂は西南一里金愛寺境内にあつて鎌倉時代將軍花見の堂宇が風雨に朽ちて面影を止めてゐる。

成

増

驛

(東京府下北豊島郡赤塚村)

池袋驛より
川越町驛より

六哩五
十三哩

賃金

特等

二十銭
四十一銭

並等

十三銭
二十七銭

(交通)

川越街道へ一丁、赤塚村、白子村等へは此の驛を便とす

(名所)

吹上觀音北廿九丁、赤塚明神東北三丁餘、赤塚城趾東北五丁、諏訪神社東北四丁、白子の宿三丁、白子不動西五丁、

(名物)

澤庵漬、練馬大根、

成増は武州北豊島郡赤塚村の西部に位して居る、春花秋草野面を彩る武蔵野の風光は漸く此邊より展開して、沿線の眺望に一入の興趣を加へて行く。赤塚の名の起因は詳かでない。武蔵風土記殘篇に錄された所に依ると武蔵國豊島郡荒墓神社大化二年丙午猿田彦を祭る云々、之から推すと或は赤塚は荒墓の轉訛であるかも知れぬ。

吹上觀音

驛より南二十九丁、埼玉縣北足立郡新白子村金泉寺内にある。境内宏壯松柏の綠色濃く茂りて幽邃の境をなし、一度寺域に足を入るれば清淨の氣自ら湧出する感がある。靈驗顯著なるを以て賽客の絶えた事が無い。觀音は天平年間行基菩薩

が諸州廻國の砌此地を過ぎて、佛法繁榮の相ありとし秘藏せる天竺傳來の椶の木を刻んで丈八寸の觀世音の立像を作り、一字の堂を建立して其處に祀つた、春風秋雨幾年かを經て此の堂宇は廢朽し、本尊は現在の金泉寺に移されたものである。安永五年十二月庫裡から火を失して本堂は遂に炎上したが、獨り尊像のみは焼けずして灰燼中より現はれたので、觀世音の功德崇高なるは益々明けく渴仰の徒諸州に遍くして忽ち本堂は再建され今日に至つたのである。

松月院

驛の東北三丁餘、里人は赤塚明神と呼んでゐる。境内森嚴なる風致に富む、開祖千葉介自秀及び其室興院の靈碑は堂の後古松の下に青き苔に包まれて残つて居る。門前の古塚の上に存置の白山權現こそ、武蔵風土記殘篇に見ゆる荒萬明神の遺跡である。

赤塚の城趾

停車場の東北五丁、赤塚村字大門の地にある。鎌倉大草紙に『康正二年正月十九日千葉實胤足利成氏と戦ひ、破れて實胤は武州石濱に自胤は武州赤塚に移る』とある。古松老杉天を摩し、往古を物語る半影が壕墟の跡に名残を止めて

絶好なる考古の資料を存して居る。

諏訪神社 驛の東北四丁の所、鬱蒼たる緑の杜に圍繞された間から赤き檜皮葺なる社の屋根が望まれる。陰曆正月十三日には境内で田遊の祭禮と云ふ極めて古雅な祭事が行はれる、田遊の祭を見んとて數里の道を遠しとせず見物に來るものが頗る多い。

徳丸原 驛の東八丁、大字徳丸本村に在る。幕末の傑物高島秋帆が其門下數百人を率ゐる此原に來つて屢々發火開展演習を行つた。幕末兵制の大改革は實に此徳丸原が生んだのである。

白子不動の瀧 驛の北五丁、白子宿の半腹村社熊野權現境域の丘上に存置する神瀧山不動堂は千有餘年前川越喜多院の開祖仙芳上人が靈夢の感應に依り築かれ喜多院の別院として傳つた古刹である。靈像靈泉の功德崇高なるを以て夙に世に知られ堂に賽客の參籠するもの頗る多い。境内は廣潤にして老杉古木鬱々とし清淨清凉なる景勝の域をなし古堂の麓に二條の瀧が翠綠滴る草叢の間から白帛を晒すが如く落ち

て飛沫霧散し涼味津々眞に銷夏の別天地である。祠前には旅館旗亭があつて客の款待に力め夏時は避暑客に賑ひ、春は熊野神社の櫻、秋は満山の紅葉錦繡を織る如く四季共に眺望絶佳である。

膝折驛 (埼玉縣北足立郡膝折村)

池袋驛より	八哩七	特等	二十七錢	並等	十八錢
川越町驛より	十哩八	貨金	三十三錢	並等	二十二錢

(交通) 川越街道へ十丁、浦和町へ三里、川越街道を経て川越へ五里、白子、新倉、内間木、大和田、片山、膝折の各村は當驛に隣接す。

(名所) 平林寺西廿八丁、氷川の瀧西十二丁、不動の瀧東北八丁、岡村の館東二丁、平澤觀音南五丁、(名物) 蕨、西洋草花、大麥、醬油、伸銅、製粉

膝折宿には小栗判官の愛馬鬼鹿毛が膝を折つたのだと云ふ面白い口碑が残つて居る。應永三年八月常陸國小栗の城は陥り城主小栗孫五郎滿重は滅び長子助重は鬼鹿毛に跨つて三州に落ちんとする途中賊の宿に泊つた。賊は助重に毒酒を侑めたが、助重はそれを知つて酒を飲んだが如く裝ひて其場に伏し更闌けるを待つて宿を拔出し鬼鹿毛に

鞭ちて途を急ぐ中に馬は膝を折つた。其處が膝折で其の馬は大和田宿に葬つたとの事である。沿道隨一の大村落にして戸數八百戸を有し人口五千以上に達して居る。而して渺茫幾十里武藏野の原は此邊から一帯に打展けて益々妙趣を湛へ雅致に富み、美しい自然の彩色を現出する。

中山邸跡 徳川大猷公に寵厚かつた馬術の名人中、山勘三郎直範が終焉の地は停車場を距る西北七丁の所、膝折村大字溝沼に在る。直範は馬術の名手として聞えたが、識者の爲めに一時播州姫路に配せられた後宥されて此地を賜つたので此處に邸を構へ剃髮して風印と號し浮世を外に武藏野の風月雪花を友として一世を終つた。

平林寺 驛より西二十八丁大和田町大字野火止にあり金鳳山と稱し實に沿道隨一の名蹟と稱せらるる古今の名刹である。寺域宏潤萬樹鬱蒼として翠綠滴らん許り、自ら清淨の靈域をなして森閑無比である。其本堂は針葉參差たる丘上に位し、麓には多摩の分流を引入れて潺々たるいさゝ川をなしてゐる。仁王門、鐘樓、經堂等按配宜しく結構を極めて寔に關東屈指の靈場たる其名に恥ない。傳記に依れば永和元年岩

槻の春桂庵主が石院和尚に請ふて開基し、天正の頃住職泰翁禪師は緇衣の身であつて兄恒岡越後守の兵を助くる爲め寺に在つて兵を率ゐてゐたとの事である。其後徳川家康公は此名刹の廢頽を慨して鐵山和尚を請ひ再興せしめ、松平信綱が川越の城主となるに及んで其頃の岩槻在から今の所へ移さうとしたが果さず、裔信輝に及んでそれが決行されたのである。妙心寺派の別格中本寺として同派の公認専門道場となり松平信綱を首め幾多知合の士の墳墓を存して殊に著名の寺院となつて居る。

業平塚 平林寺境内に在る。又の名を野火止塚と呼ぶ。昔在原業平が或る女を誘ふて武藏野の草原に潜んだ時、追手の者が迫り來て野に火を放たうとした、女は驚ろいて『武藏野は今日はなやきぞ若草のつまもこもれりわれもこもれり』この歌を詠じた、追手はそれを聞いて火を放つ事を止めたと云ふ。大和田町の中に野火止なる地名のあるのは之から起つたのである。今も田圃の間に二尺許りの石が苔に蒸されて野火止塚の名残を止めてゐる。

岡村の館

太田新六郎康資の館跡は膝折村字岡村に在る。停車場から東二丁の地

枝振り面白き松樹常磐の色を湛へて生茂る小坪の丘は眼界展け眺望切々に風情がある館を廻らした壕の跡は今も尙俵を存して有りし昔を語つて居る。

平澤觀音 停車場の南五丁なる平澤觀音は十二面の觀音を安置す此地の開祖高麗氏の開基である。境城廣く樹木鬱蒼とした仙寰の域で、境内に三百坪許りの小池がある、水深幾かに一尺餘に過ぎないが早魃の時も乾かず淨水滾々として盡きない、里人は不思議の一つに數へて居る。

氷川の瀧 驛の西北十丁餘、川越街道を過ぎた杜の奥に奉祀された氷川神社は、祭神は素盞鳴尊で祠の東なる池中には辨財天の小祠がある。藍を溶かした如なる此池から落つる水は瀧をなして里の小川へ灑いで居るが飛瀑白沫境内を濡ふして夏日の清遊に好適である。

不動の瀧 驛の東北八丁、東圓寺畔に在る、同寺は松光山藥王院と稱し、運慶作の藥師を本尊として居る、開基は詳かでないが中興の祖は法印永慶で、太田道灌が長祿年間此處に築城した事がある。境内の一角に綠蔭に白帛を展べた如く、一條の

飛瀑かゝりて奇景をなし不動尊を祀つてある、能野神社、富士山等の小名勝が附近に點在して風光極めて宜しく一幅の畫題である、尙此地は近々公園となる計畫がある。

附近の名所 比留間農園は近時の經營に係るもので驛から五丁、地積四町歩の田園は悉く花卉を植ゑ付けて四時紅白黃紫の花の色を絶たず艶やかなる美景を呈してゐる、殊に此邊は春は蕨狩、秋は茸狩の地として知られてゐる。驛を距る東南十丁の牛房山は新羅王子が京都より下向の途病を得て此處に棲んだと傳へられてゐる。

志 木 驛 (埼玉縣北足立郡志木町)

池袋驛より 十一哩一
川越町驛より 八哩四 貨金 特等 三十五錢 並等 二十三錢
特等 二十六錢 並等 十七錢

(交通) 志木町は驛の東北六丁餘、新河岸川は八丁にて河岸に達す、大和田町は西南三十丁、當驛に昇降を便とする附近村落は宗岡、水谷の各村にて何れも里餘、浦和へ二里所澤へ三里、川越へは四里と稱さる

(名所) 敷島神社東北八丁、館跡北十丁、寶幢寺北八丁、

川越街道隨一の繁華な町である。人口四千五百町は新河岸川に臨み、水路六里を遡航すれば川越に達し、二里餘を下れば荒川に至る舟楫の便がある。維新前は館町或

は引又町と稱へた。往昔志木の繁盛を見たのは松平伊豆守信綱の賜である。信綱は川越と江戸との運輸の便を策して、荒川の水路を引き新河岸川の疏水を築いた。茲に於て志木も一路江戸との水利の便を得て殷賑を呈し今日の隆盛を見るに至つたのである。又同町の名家井下田氏は志木の發展に努力し多大の費用と勢力とを抛つて、町の高上に盡したのである。即ち先代藤十郎氏（現存）は一意専心地方の大開拓に従事し、道路の改修、橋梁の修復其他の大事を施し、直接甲州地方と車馬の便を通じて沿道の物資を志木に集め、此處から船で江戸へ送るの方法を講じた。當主慶十郎氏又東上鐵道敷設に關しては盡瘁是努めた所蓋し絶大である。

數島神社

志木町の中央に位す、老松社殿を没し、社域の背後には氷白き新河岸川の流れ清く、一入の風情を止めて居る。境内に田子富士と稱する山がある、胎内潜り登山道等悉く富士山を模したものである。驛の北東八丁、格好の遊覽地である。

館の址

驛を距る北十丁、眞言宗長勝院は、境内に古碑多く、脚下を流るる柳瀬の清流を隔て、大富士の秀嶺を望む眺めは、宛然一大パノラマの感がある。昔北條

の巨大石越後の守の館趾は長勝院の東に接した地で同院の境内の幾部分も古は館の中であつた。越後守は武藏多摩郡瀧山の城主信濃守の弟で、天正十八年秀吉の爲めに亡ぼされたのであつた、北條五代記には此時越後守は小田原城にあつて寄手に向つたとある。小田原城陥落と共に秀吉の兵が此處に迫つたのではあるまいか、一説には天正四年上杉輝虎の爲めに亡ぼさるゝとある。

寶幢寺

北八丁、志木町西北の一角に存する靈場で新義眞言宗に屬し開基は詳かでないが、少くとも五百年以上を経た古刹である。徳川大猷公が鷹狩の途次此寺に憩つた時其の境内に比して門前の地が狭く眺望を妨くると一町歩の土地を寄附した。本堂は天明六年に焼失し今も假堂の儘である。焼失前堂宇の壯麗であつた事は苔蒸せる其礎が語つてゐる。境内の枝垂櫻は名木として知られて居る。

東上稻荷

停車場前井下田家の宅地内に鎮座の稻荷社で、寛政十四年川越城主松平周防守が伏見から勸請したと云ふ由緒のある小祠であるが、本線開通に付盡力された井下田慶十郎氏は紀念の爲めに東上稻荷と稱號を奉つて現在の所に遷宮し旅客の参

詣に便ならしめた。

志木河岸 月に佳く、雪に面白い新河岸川の邊は柳が茂つて繪の如な風情がある殊に古來螢の名所として聞へ、風涼しき夏の夜に紫の星が降る如に螢の亂れ飛ぶ有様は美觀である。夜船の通ふ船の音を聞き乍ら、橋畔に佇めば、夏季の暑さを忘れて、眞に沿道隨一の清凉郷と思はれる。

野火止用水 多摩川の分水で大和田町附近一帯の灌漑用に充てられて居る、承應年間松平伊豆守信綱が其の家人で水利に詳しい安松金右衛門なる者に命じて十六里を隔つる多摩川の水を引かしたものである。工事竣工の當坐一滴の水も流れなかつたので金右衛門は切腹しやうと覺悟した。其時一農夫が「堀が出来た爲め地が濕つて埃が立たなくなつた」と云つた言葉を聞いて切腹を思ひ留まつて徐ろに結果を待つた。果せる哉三年を経た大雨の時始めて通水を見其流れが今も猶盡きないのである。

伊呂波樋 野火止用水竣工するや、時の宗岡村の知行白井武左衛門は用水の一部を引くに決し、萬治二年志木町より掛樋を以て新河岸川の上を通じ之を村内の水田に

沃いた、其掛樋の継合が四十八あるので伊呂波樋と稱し、其構造巧妙を極めた。明治三十三年以來鐵管を以て之に代へ、水壓を利用する事となつたが、文明の餘澤は白井武左衛門苦心の効益を村民に潤はしめつゝある。

大和田町 驛より西南二十丁、柳瀬川の流域に沿ふて繁華な街衢をなし、人口四千五百、志木より入間川、所澤等への要路に當つてゐる。町は大和田、野火止、北野、菅澤、西堀の五字に分れ、麥、甘藷等の産額が多く、町民は比較的富裕である商業も亦盛である。

其他の附近名所 大和田町北野には北野薬師がある。古刹普光明寺には千體地像を安置す六郷某が武藏野の古戦場として名高い何れも驛から二十八町、驛の北東一里、荒川河畔は櫻草の名所として知られ、春時紅緑彩る櫻草の美觀は都人士の眼を驚ろかすに足るものがある。道興準后の歌で著名の濱崎の古址は驛から南東二丁、盛夏の涼郷實岡の天神宮は北東十五丁の宗岡村にある。

鶴瀨驛 (埼玉縣入間郡鶴瀨村)

池袋驛より 十三哩七分 貨金 特等 四十二錢 並等 二十八錢
川越町驛より 五哩八分 特等 十八錢 並等 十二錢

(交通) 川越街道十四町、川越町へ三里、所澤へも三里、入間郡福岡、南畑、水谷、三芳、大井の各村に隣接
(名所) 南畑城址東北十五丁、富の地蔵西廿七丁、辨天の瀧北六丁、榛名神社北十二丁、
(名物) 甘藷、茶、麥、野菜、

停車場は鶴瀨村の中央に位し西に川越街道、東には新河岸川の水路がある。所澤へは西南三里平坦なる道路がある。入間川、入間村等も西方二里餘道路は砥の如く平で交通の便が好い。近時驛前から三芳村に至る二哩七分の人車鐵道敷設の計畫があるが此が竣成の曉には隣村から産出する甘藷野菜は悉く此驛に集まつて東京市場に出づる事となるべく甘藷のみにても一箇年十五萬俵の積出を見るであらう。此地は元鶴瀨の二箇村に分れて居たが維新の際兩村を併せて鶴瀨村と呼ぶに至つた。

諏訪神社 驛の北六丁、字折戸にあり、松林に包まれて古祠を存する。鶴瀨の鎮守で祭神は諏訪明神である。入幡神社及び牛頭天王の小祠を末社として祀つてある。

翠影濃く境内を埋めて、夏尚寒く、殊には社殿の右に榎々として落つる瀧が狹霧のやうな沫を吐いて居る、避暑納涼に好適である。稱して辨天の瀧と云ふ。

榛名権現 驛北十二丁、字勝瀨の地にあり、社内自ら仙臺を形造つてゐる。本社なる榛名権現並びに末社なる淺間神社の社殿は古雅にして崇高である。境内野生の藤が多い、春夏の交際の松が枝から下る由縁の色濃き紫房風にゆらぐ光景は寔に趣きが深い。夏季は又涼味漲るばかりである。

貝塚山 驛北十丁鶴間の小名貝塚にあり、面積二十餘坪、塚の上には松樹點々として風趣ある眺めである。明治四十年五月帝國大學より川上文學士、石田理學士、野中委員外學生等が來りて此の附近を開闢し、古刀、石器、貝殻等を發見した。恐らくは太古の遺蹟であらう。

南畑城址 驛の東北十五丁、南畑村下南畑志木街道寄の一地にあり、修驗十王院の跡、今は荒寥慘憺として夢の昔を語つて居る。天文年間難波田彈正憲重の居城で後に上田周防守が據つた所である。難波田氏の祖は武藏七黨の中なる村山黨の金子六郎

家範の子難波田小太郎高範で、現地名の南畑は其頃難波田の文字を用ゐて居た爲めに水災に罹る事頻りなので今の如く改めたのだといふ。

富の地藏 驛西二十五丁三芳村の名刹三富山多福寺は臨濟宗京都妙心寺の末元祿九年柳澤保明の草創で境内幽邃、伽藍は結構を極めて居る。多福寺の西二丁、木の宮の地に存置の木の宮地藏は又の名を富の地藏と呼で知られてゐる。其昔阪上田村磨が東夷征討の砌、此の地を過ぎて捷利を祈る爲め建立したものだと傳へられて居る二尺五寸の尊像は刀法の妙掬すべく、信者常に多く香煙は蒼色を帯びた堂の前に絶へず漲つてゐる。

其他附近の名所 太田、北條氏の居城として傳はる柳瀬城趾は驛南二十丁、柳瀬の清流に臨んだ懸崖の邊に在つて、自ら要害をなしてゐる。一帯に當驛附近は濕潤地多く鳴鶴等の群がる事夥しい。隠れた狩獵家の寶庫と稱されて年々好獵家の來遊が増加して來た。

上 福 岡 驛

(埼玉縣入間郡福岡村)

池袋驛より 十六哩一分 貨金 特等 五十錢 並等 三十三錢
川越驛より 三哩四分 貨金 特等 十一錢 並等 七錢

(交通) 川越町へ一里半、入間川町へ三里半、上福岡河岸へ十丁、大井、福原、南古谷、堀兼の各村へは當驛を便とす、

(名所) 天神教會東五丁、古尾谷八幡北東一里十七丁、堀兼の井西南三里、
(名物) 茶、麥、甘藷

入間郡福岡村の中央に位して居る。新河岸川の清流北東に流れ、東京街道は南西數丁の所にある。地味能く肥え、甘藷、麥、茶等其他の農作物を多く産する。

天神教會本部 驛の東北十六丁、福岡村中福岡の地にある。教主富田久良子が信仰に依つて一家の危難を免れ、庶民救済の道を汎く布教の爲めに明治三十一年教會を設立して茲に社殿を奉建した。祭神は參神二靈を祀り月の十四日を定めて祭日となし教主自ら祈禱を行ひ神道の教へを説く。其後千葉、茨城、東京地方へ迄擴まつて分教會の設立さるゝもの十個所に及び、信徒四千餘人を算するに至つた。茲に於て教會

本部にては信者の寄進に基き驛より五丁の松林三千餘坪の地を開鑿して神苑を築き、事務所を建設し、明春を期してこゝへ遷宮する計畫で、目下工事中であるが、社殿は結構壯麗を極め、神苑は梅樹數百株を植ゑて頗る風致を添える筈であるから、工事竣成の曉には東上沿線に於ける一新靈場を形造る事であらふ。

藥王寺水天宮

驛の東南十七丁、新河岸川に近く川沿の地にある。毎月五日祭禮を行ひ、隣接町村から參詣者頗る多く、殊に新河岸川を往來する船人の信仰が深い。

氷川神社

驛東十五丁、字觀音前にあり、長宮氷川神社といふ。長徳元年出雲大社より勸請すと稱されてゐるが詳かでない。杉の杜に包まれて閑雅幽邃の域をなして居る。

古尾谷八幡

貞觀年間の奉齊との傳へられて居る。應神天皇、神功皇后を祀る。本殿拜殿の結構壯麗を極め、境内廣潤、老杉古樟天を摩した其神苑には辨財天、天満宮、天照大神、春日明神、稻荷等の末社が散在する。驛の北東一里十七丁、八幡宮に隣接した灌頂院は天長年中慈覺大師の創設で傳教大師作裝甲の不動を安置してある。

又其附近に善仲寺の名刹がある。伽藍宏壯頗る雄大なる氣に富む。

堀兼の井

日本武尊が東征の砌穿られた堀兼の井は驛の西南三里、堀兼神社の境内にある。清泉滾々として盡きない、堀兼神社に近き三つ木原は永享年間上杉顯定が結城滿朝と兵を交へた所で、又天文年間上杉朝定も北條氏綱と此處に戦つたと傳へられてゐる。

新河岸

驛

(埼玉縣入間郡高階村)

池袋驛より	十七哩六分	特等	五十四錢	並等	三十六錢
川越町驛より	一哩九分	賃金	六錢	並等	四錢
(交通)	川越街道を経て川越町へ一里、大井町へ一里各乗合馬車の便あり、川越、大井町へ各十錢、新河岸川岸へ三丁				

(名所) 新河岸觀音東北五丁、氷川神社東北三丁、うとう坂西南十丁、愛宕神社東北十四丁、新河岸東七丁

(名物) 大麥、小麥、甘藷、里芋、コイルテン

川越の恩人と謂はれて居る松平伊豆守信綱が生涯の事業の一として、内川の水路を修めて江戸川越間の水運の便を良くした、之を新河岸川と呼ぶ。新河岸驛は此運河の

流るゝ入間郡高階村大字新河岸に在る。新河岸川は源を伊佐沼に發し宗岡村、志木町を経て荒川に入る、中武の地に於ける交通上の一大動脈で水路の開けたる寛文二年から東上鐵道開通前に到る迄の長い間川越方面から東都に輸送さるゝ物資は悉く此川に依つたものである、驛は河西の桑園を切り拓いて設けられ、四望廣闊四季の眺めに適する。

新河岸觀音 驛の東方五丁、新河岸の流れに臨んだ丘の上に山王社と共に祀られてある、境内風光面白く春は櫻咲き夏の夜は清き流れの邊に螢飛び亂れ、秋は新河岸川を隔てゝ望む田の面の景色に趣が深い。冬は又雪見の場所として知られて居る。或人は此附近の風景を以て廣重の繪だと賞した。觀音堂は嘗て火災に遭ひ、今は假堂を存する。此堂は元木之目村の長者が息女の病を治せんと祈願の爲め建立したものだといふ。其水屋に北條氏の三鱗の紋があり。隠れた由緒を偲ばせる。

諏訪右馬亮砦跡 驛の南方三丁、寺尾の地より上下新河岸に跨り地形起伏して自ら要害の地をなし、生ひ茂る草樹の間にも居城の蹟を偲ぶ事が出来る。口碑に依

れば此の邊は昔北條時代諏訪三河守右馬亮が砦を築いた處で、砂村の境ひには土居があり要害と稱され、又寺尾の地には猫山と云ふがあり、根古屋の轉訛したものだと傳へられて明かに古城の面影を追懷するに足るべき根蹟を止むる。

愛宕神社 驛を距る東北十四丁、翠樹高陵を包める仙波河岸に臨んで居る。社頭は高く懸崖に聳るて正に附近隨一の高所に位し、古色蒼然たる殿堂を蔽へる老松森として中天を摩し、實に壯麗無比の靈域をなしてゐる。従つて遠近の眺望頗る佳く清き泉は陵の中腹から湧き、小さき二條の瀧をなして麓の池中に白帛を吐いてゐる。夏季納涼の勝地として沿線に名高く、川越近傍から多くの遊士を招いで瀧見亭は却々の賑いを呈する。

雨塘坂 廻國雜記に『うたう坂越えて苦しき行末をやす方と啼く鳥の音もかな』とある古歌に名高い雨塘坂は驛の西南十丁仙波村字岸なる東京道がそれである。年古りたる杉樹に挟まれた路の煙雨の景は擲すべきものがある。

諏訪神社 驛より南八丁、字藤間の地にあり。近來村内の諸社を合祀し神明社、

熊野社、天満宮、稻荷社、八坂社等皆境内に移された。毎年八月二十七日が祭禮で非常な賑ひを呈する。境内松杉鬱蒼として頗る神嚴の地域である。

鴨獵の好適地

驛の東北新河岸川に架した旭橋を渡れば荒蕪地極て多く、一面に澤地をなして鴨獵に適して居る。鴨獵地として有名な伊佐沼も此處から一里を出でないのであるから好獵家は此驛を中心として狩獵を試みるのが最も興深い事である。殊に狩獵の名家として、畜大家として獵界に噴々たる藏持泰三氏は高階村寺尾の地に住し一般獵友の好侶伴として特に便宜を計つて居られる(沿線の狩獵地の項参照)

其他附近の名所

氷川神社は東北三丁、大宮町より勸請したもので祭神は素盞鳴尊である。社域は廣くはないが老杉の茂り鬱蒼として晝も靜寂である。砂窪の陣地は驛西一里の福原村の北部に在る、即ち天文年間土杉政憲が川越を包圍するに當り此所に陣地を布いたのである。

川越西町驛

(埼玉縣入間郡川越町)

池袋驛より
川越町驛より

十九哩
〇哩五分

賃金 特等

五十四錢
二錢

並等

三十八錢
一錢

(交通)

當驛は川越西町にあり川越町西部方面の昇降に最も便なり、名所其他川越町驛の項に譲る

川越町驛

(埼玉縣入間郡川越町)

上野驛より
池袋驛より

廿五哩
十九哩五分

賃金 特等

六十三錢
五十四錢

並等

四十六錢
三十九錢

(交通)

入間郡南大塚、入間川、所澤を経て中央線に至る川越鐵道は新田町に起點を有す、伊佐沼より荒川筋を経て大宮街道より中仙道大宮に至り東北線に連絡する川越電車は清水町に起點を置く、馬車は江戸町の佐久間馬車、本町の馬車店にて扱ひ川越上尾間(一日往復四回)川越越生間(一日四回)川越島田間(一日三回)川越松山間(一日五回)川越板戸間(二日二回)川越桶川間(一日二回)川越大井間(一日四回)川越高萩間(一日二回)

(名所)

喜多院東南八丁、傳代十五錢、川越城址北東八丁、三芳野神社同、氷川神社東北十四丁、浮島稻荷東北八丁、烏山神社東北五丁、六塚稻荷北五丁、鏡稻荷北九丁、蓮馨寺北五丁、東明寺十丁、養壽院北八丁、萩生徂徠屋敷跡東北九丁、札の辻古戦場北五丁、唯心庵北七丁、伊佐沼東三十丁

(名物)

米穀、川越甘藷、製茶、蒟、生絲、織物、簞笥、鐵器

太田道真が築城以來武藏の名邑として殷賑を極めて居る川越町は人口約三萬戸數約

五千商業地として中武第一と稱せられて居る。而も仲仙道に離れて居るの故を以て帝都との交通は電気鐵道に依つて大宮を迂回するか又は川越鐵道に依つて中央線に出づるから然らざれば封建時代の遺物たる新河岸川の水運に依るの外に途が無かつた。それが爲約百萬石に近き米麥と一千萬貫の甘藷と二百萬反の織物と四萬貫の生絲の重要物産が集散するにも係らず市街の發展比較的遅々として明治維新前後と大差を見ない、否寧ろ柳澤氏松平氏等の居城たりし時代の方が今日より猶殷盛であつたとさへ言はれて居る。幸なる哉此發展の素質を有し中武開拓の一大富源を包藏せる川越町に東上鐵道は敷設され、帝都との距離を従前よりも二分の一に短縮せられた事は確かに彼に一大注射を與へたものである。之れに依りて彼の遅々たる歩みは俄かに急速度を増し、數年の後には一大商業地として獨り武藏一州に止まらず全國に雄躍するに至るは最早疑ふべからざる事である。

川越の沿革 川越の起原は甚だ詳かではないが、諸書に徴して之を按ずるに、今より凡そ八百八十年前に部落をなしたものでらしく思はれる。併しそれは今の川越

の地ではなく西半里許の上戸地方であつて、古書に據ると其所を川越庄と呼んで居たが、太田道真築城の御今の所に移つたのだとある、或は又築城したのは道真に非ず其子道灌なりと傳へられて居る。道灌没後上杉定正の子朝良居城し後北條氏綱是を略して城主となつた。更に又氏綱の没後氏康代つて城主となり、徳川氏に及んで酒井河内守重忠、同苗備後守利忠、同苗忠勝等相次いで主となり、更に堀田加賀守正盛封せられ慶長十六年には松平伊豆守信綱が城主となつた。川越の商業が今日の隆昌を見るに至つたのは實に信綱の施設が與つて力がある信綱の孫信輝が下總古河へ移さるゝや代つて城主となつたのは松平美濃守吉保で、吉保も又川越町商業の發達並に領内に於ける農業工業の發展に力を致した。吉保去つて秋元但馬守居城し此處に數代を経たが明和二年山形に移り松平大和守直恒之に代つて文久三年迄數代續き、代つて來りし松平周防守康英廢藩迄居城したのである。維新後數回に亘り關係部落の離合があつた後現在、の如く町内は川越、松郷、脇田、小久保、東明寺、寺井、小仙波、野田の八區に分れ東西一里三十丁、南北三十丁の地區を川越町と定められたのである。

川越の實業機關 商業を以て立つて居る川越には幾多の實業機關が完備して居る。即ち川越商業會議所は廊町（驛の東北十丁）に川越實業組合も同じ所に、埼玉縣織物同業組合は志義町（東北五丁）に、入間郡茶業組合は郡役町内（東北十丁）、醬油醸造組合は高澤町（北七丁）、酒類組合は猪鼻町（東北五丁）、箆笥商組合は志義町に、織物市場は連雀町（東五丁）にあつて何れも川越町に於ける商工業の發達に資して居る。

川越の學校 川越町に於ける教育機關は驛前（六軒町）に縣立川越商業女學校の大夏登ゆるを始めとして川越染織同校（通町驛の東七丁）縣立川越中學校（舊城内東北十一丁）及び訓育學校、外に七箇の町立小學校が在る。

川越城趾 四百年の歴史を有する川越町には討ねべき名所舊蹟が頗る多い、其第一に擧ぐべきは川越城趾であらう、川越城は太田父子の手に築かれた事は前に掲げた如くである。本丸、二の丸、三の丸、外曲輪、内曲輪、新曲輪の各要害を始め三の櫓臺、十二の城門の備つた名城の餘は全く失せ果て、今は僅かに苔蒸したる廢壘藻草

青き殘塚に依つてありし昔を偲ぶに過ぎない。

三芳野神社 松青き舊城本丸の東に鎮座する三芳野神社は素盞鳴尊、奇稻田姫命を祭神とし北野天神を合祀してゐる。社域廣ろくして梅樹に富み社殿は古雅な建築で結構宏壯である。貞觀三年在原業平東國下向の時此の邊りに來りて當社に詣て崇敬の念措く能はず、銅開扇を奉納した。後其扇を神體として業平の靈を合祀し更に太田父子の靈をも合祀したのである社殿の側なる丘陵に登れば三芳野一帯の水田を隔て、鏡の如き伊佐沼の風光に接する形勝の地である。

霧吹の井 舊城なる廊町新田輪趾に石蓋をなして土を覆ふた古井がある。昔此井は川越城危険の時に開けは深霧は漂々として立ち昇り敵軍を潰亂し得る事の出来たものであるとの口碑が傳はる。

氷川神社 驛の東北十四丁、宮下町の東隅にある氷川神社は欽明天皇即位八年北足立郡大宮町なる氷川神社より勧請せしものである。川越の城主は代々之れを尊信した、今も尚川越町の總鎮守として郷人の崇敬する所である。祭神は素盞鳴尊、奇稻田

姫命、大國主命、脚摩乳神、午摩乳神である。寛永五年酒井讃岐守社殿を修築し、元禄八年柳澤吉明が修理を加へた。現時の社殿は白木造で神殿には精緻なる彫刻が施されてある。幾抱もある大樑の間に二十四末社が散在して居る。境内の趣は殊に幽雅である。

浮島稻荷 驛の東北八丁、久保町の水田中に在る。浮島神社は川越城築造當時に創建されしものである。昔は其周圍芦生ひ茂りて遠く望めば孤島の如き觀があつたので、此名が起つたのである。數百坪の境内には枝振面白き青松蜿蜒々として繁り清き泉の湧き出で、池をなして居るなど風趣に富んで居る。

烏山神社 驛を距る東北五丁、志義町に在る太田道眞が川越城を築くに當り、富士の展望を妨ぐる城西の森林を伐採せしめて、石の小祠を發見した、中に小なる圓筒があつた、道眞は怪しみつゝ之れを抜けば左の如き願書が現はれた。

源家勝平、怨敵退散、子孫長榮、大願成就守護

承安三癸巳天四月十五日

願主河島武盛

道眞は築城成功の吉兆なりとて大に喜び一社を創建し素盞鳴尊外四座を祀つた。烏山なる名は樹木多く鶉聲の絶へた事がない爲起つたのである。

六塚稻荷 名所圖繪に『古昔武藏の一大廣原にして不食の地たり中古の時任國の司荒野の田甫數百萬を開くや始めて入間郡の内荒丘六つを起して社を立て稻荷神社を祀る。其の後太田道眞始めて置城の時五丘を壊して一祠となす此稻荷是なり』とある。六塚稻荷は驛の北六丁の高澤町にある、赤間川の清流に臨み遠く秩父の連山を望む、風光明媚の地である。櫻樹多く花時の眺めは一しほである。

鏡稻荷 驛の北八丁、裏宿なる今井氏の邸内にある。新田義貞の妾小夜姫の墓のありし所なるにより小夜稻荷とも呼んで居る。鏡稻荷の名は立願成就せる者が鏡を納めるからである。社の後に枝下三百坪に及ぶ大榎がある。

蓮馨寺 天文年中時の川越城主大尊寺駿河守政繁の母が北足立郡平方村に住して僧感譽に歸依し精舎を建てた。それが蓮馨寺である。孤峰山寶池院と號し、淨土宗關

東十八檀林の一として名が高い。境内廣く堂宇は宏壯なる檜造のもの十棟三百八十坪、結構の壯嚴なる事近縣無比と稱せられて居たが明治二十六年三月の大火に類焼して爾來久しく荒廢の姿であつたを、近時本堂、寺院の新築成つて稍舊觀に復した。開山感譽の弟子吞龍上人を勸請して毎月八日を緣日として居る。驛の東北五丁。

東明寺

停車場の北十丁、志多町にある。開山は眞教上人で、永仁年中上人が川越に來た時小やかな小堂を建て、頻りに佛を念じてゐた若僧がある。上人は此僧を化度して臨陀彌を名づけ、其所に錫を止めて臨陀彌と共に堂宇の建立に努めた。之が東明寺の濫觴である。昔は域境廣く七堂伽藍備はつてゐたが、天文十五年の川越夜軍の際、兵燹に罹つてさしも輪奐の美を極めた堂宇も灰燼と化した。今は時宗大本山藤澤清淨光寺の末に屬して居る。境内の古塚は此時の戦死者を葬つた所である。

養壽院

驛北八丁の南町に在る、寛文年間川越遠江守經重の建立に係り開祖は傳燈大阿闍梨圓度、中興の祖は扇叟で曹洞宗に屬して居る。天正年間徳川家康が川越附近に鷹狩の砌同寺を宿に充てた爲め朱印地十石を附與した。川越城代々の主も亦深

く同院を崇敬し外護の任を盡くした。境内老樹多く晝猶暗き迄茂り莊重の氣が漲つて居る淨地である。境内に川越太郎の墳墓がある。

妙養寺

停車場の北一丁境町に在る妙養寺は昔日蓮上人が同學の誼ある喜多院の尊海僧正を訪ふた歸途、老夫婦の家に宿つた、老夫婦は高僧の宿泊せるを徳として遂に一字の寺院を建立した。即ち之が妙養寺である、中興の祖は日在上人である。本行院 喜多院に北隣して居る、本尊なる不動明王は嘉永年間僧一心の勸進せるもので、下總成田山の第一支場として其名が高い。毎月二十七日の緣日には川越町の人々は素より近郷の人々が參詣する。

見立寺

驛北六丁、高澤町に在り、赤間川の細流に臨み風光が佳い、壽昌山了性院と號し、開山は感譽上人にして蓮馨寺草創の前に建立したものである。

荻生徂徠屋敷跡

驛の東北九丁、宮下町川越區裁判所がそれである。柳澤吉保に事へて居た徂徠は吉保が川越城主となるや従つて此の地に寓した、當時組來の屋敷にあつた石燈籠は今も笠幡村發智庄平方に残つてゐる。

札の辻古戰場

天文十五年川越夜襲の時北條氏綱の軍が兩上杉軍を一舉に破つた古戰場は本町、高濱町、南町北町の四街の十字路附近で元標が置かれてある。當時兩上杉軍の死骸は此邊りに山をなしたと云ふ、以前此の辻を東明寺口と稱せられたが徳川氏時此に高札場が設けられた爲め札の辻の稱が起つた。驛北五丁、

唯心庵

柳澤侯の臣に山東小市郎と云ふ風流人があつた。赤間川の流れを引入れ

築山を構へて、數寄を凝らした庭園を作つて濯紫園と名付けた。墨客歌人が此處に俳諧詩歌の薙を開いた事が屢々あつた。柳澤侯が甲府へ移封せらるゝと共に山東氏も之に従つた爲め園は一時荒廢に歸したが唯心なる僧が上を修復して住まつた。唯心庵の名は此の時に起つたものである。今は喜多氏の邸宅に屬してゐる。驛北七丁坂下町

伊佐沼

驛より東三十丁の所に東西三町南北十七町の沼がある水清く芦荻岸に茂

り景色頗る面白い、赤間の流が北から注ぎ沼から流るゝ水は九十川をなして居る沼の西なる藥師堂は松平美濃守吉保の建立せる處である、仲秋觀月の名所として知られて居る。

東照宮

喜多院の境内に續く老樹鬱蒼たる丘上に鎮座する社殿がそれである、數

十級の石階上なる丹塗の玉垣を繞らし朱碧に彩られた其の本殿及び拜殿は天海大僧正が檀恩奉謝の爲に建立せられたものである。元は喜多院代々の住持が常に奉事して來たが明治維新神佛甄別の際神祠となりて以來神官の祭祀する所となつた同社の寶物なる岩佐又兵衛尉第三十六歌仙の懸額及び探幽筆鷹の圖十二面は共に稀代の珍品で三十六歌仙は國寶に指定せられた。

田面澤驛

(埼玉縣入間郡田面澤村)

池袋驛より
川越町驛より

二十哩九分
一哩四分

賃金
特等

五十九錢
五錢

並等

四十二錢
三錢

(交通) 當驛は川越高麗街道及び川越入間川街道の要路にして川越町へ二十丁、入間川町へ三里半、山田、太田、名畑、霞關の各村は必ず當驛へ下車するを宜とす。

(名所) 入間川鮎狩地驛に接近す、常樂寺北四丁
(名物) 入間川の鮎、鵜、雜魚、砂利、米、蒭

伊勢物語に下のやうな事がある。昔在原業平が此の地に來て或る女に逢はふとした

其時女の母が業平に一首の歌を與へた『三芳野のたのむの鴈もひたふるに君が方にぞ
よるどなくなる』業平は次に如く返した『我方によるとなくなる三芳野のたのむの雁
をいかで忘れん』田面澤の名はそれから起つたのだと云ふ。始めは多能武澤と云つた
のである、田面澤の地は葦多く雁巢くひて秋は風情が多かつたので、古來名歌に數多
く讀まれてある。驛は入間川の景勝地に設けられ四望佳絶である。

入間川の漁漁 停車場の北を流るゝ入間川は水清く澄みて底の砂も數へる事が
出来る、鮎の發生する事多摩川以上である爲めに毎年開禁の六月一日から秋迄附近一
帯は鮎狩に活況を呈する。(入間川の鮎漁參照)

常樂寺 停車場の北方四丁入間川の流を隔てゝ叢中に聳ゆる大覺がそれである。
山門より仁王門へ通ふ茨の隧道境内の綠樹に風情を添へて寔に古雅な寺域である。川
越山と號し時宗に屬して、遊行三祖他阿上人の開山に係り中興せしは大導寺駿河守で
ある。寺内に大導寺氏の墓が残つてゐる。川越の庄は以前此の地に在つたのであるが
太田氏築城の時今の所に移つたとの説がある、寺の西に太古の遺蹟たる土居の跡が存

して居る。

日枝神社 常樂寺から西三丁の所に在る。綠林鬱蒼として神々しい、其の南方な
る古墳は三芳野塚、又は初雁塚と稱し此邊は悉く川越庄の舊地である、眼界展け眺望
佳く殊に雁渡る頃の詠めは一しほである。古來雁の名所として傳へられたのは道理で
ある。

其他の名所 大智寺は驛の西北一里勝岡村大字石井にあり關東の巨刹として聞
えて居る。境内には黒川丹波守一族の墳墓がある。鎌倉時代武藏十二郡の總社として
崇敬された大宮住吉神社は驛の西北一里五丁、勝呂村塚越にある。慶長年間島田左京
亮開基の永源寺は驛の西北一里十丁坂戸町にある、毎年四月八日の緣日には參詣者で
賑ひを呈する。

喜多院

喜多院は川越町の南方小仙波の地に在り、東上線川越町驛より東南約八丁を隔てる

綠叢の間に聳へた大厦がそれである。四萬八千餘坪の其の苑庭こそ眞に神仙の境に位置し生ひ茂る老杉森として千古の苔蒼々、昔ながらの小丘を繞らして修築されたる林泉は自然のまゝに、春は翠綠の間に綺錯せる櫻花爛漫として萬朶の色を競ひ、秋は又滿山の楓葉宛ら錦繡を織るにも似て景趣寔に繪の如く、而も閑雅幽邃並びなき淨域をなして居る。斯くの如き景勝の域、清淨の境を劃して建立されたる大伽藍は兩大師を勸請せる大師堂を首めとして、江戸城本丸紅葉山御殿を移せる客殿内の三代將軍誕生の間、更に又天海僧正の壽像を安置せる開山堂三代將軍家光公寄附に係る宋版の一切經を納むる經藏其他一として結構の壯ならぬは無い。若夫れ往古仙芳上人草創の寺壓を聞くに及んで當代の遺韻を偲び、赫灼として輝く一山の靈光に浴するならば、敬虔の念量自ら發して神秘の情緒は綿々として湧出するのである。されば之れに依つて信仰の人、探勝の雅客常に踵を接し、又都人士は纔かに閑遊一日の靈場地として好適の處であるから近年參詣するものが益々其の數を加へて來たのである。

小仙波の由來

喜多院は山號を星野山無量壽寺と稱し天臺宗の巨刹にして關東

第一の靈場である。抑も喜多院開基の小仙波の地については草創の昔を物語る一片の神話がある。往昔關東の地が未だ天地開闢の初めに當つて渺茫たる滄海に浸され、漫々たる碧波寄せては返したる見る一望太平洋の彼方此方に木の葉の如き島嶼が點在してゐた。其の頃仙芳と呼ぶ仙人が島の一角に現はれて龍神の化現せる老翁に請ひ仙術を以て波上に法衣を布くや忽ち江海は衣の擴がるが儘に一變して廣漠たる陸地と化した。仙人は龍神の爲め別に一小池を残して栖處としたのが現在の辨天池で、蒼然たる古色は水の面に漂つてゐる。即ち仙波の地名は茲に創設の基をなしたものである。

喜多院の緣起

淳和天皇の天長七年天臺第三祖慈覺大師は勅命を奉じて寶堂を建立し新に無量壽寺の號を賜つた。大師即ち彌陀如來の像を刻し、不動明王、毘沙門天王を脇侍となして、本堂に安置し更に堂後の叢中に石刻の一切經を瘞めて小丘を築き多寶塔を造つた。丘陵の左方に日枝山土を祀り、右には白山明神の社を建て、其傍に法華三昧堂を建立し大師は専ら顯密兩乘を傳布し鎮護の道場としたのである。三百七十餘年は夢と過ぎて土御門天皇の文久元年兵燹に罹り、伏見天皇の永仁四年に至

り尊海僧正勅命を奉じて靈跡を再建する事となつた、偶々僧正は牛車に乗つて三芳野を過ぎ行く折しも、南方老杉の梢に明星が輝いて明かに靈跡を示し僧正の車を導いたので、僧正は明星の靈威に應じ、堂宇再建と共に星野山の山號を附したのである。その後尊海師慈慧大師の靈像を安置して降魔の威德を輝かし、佛藏院（北院）佛地院（中院）を創設して宗乘を提唱し、茲に革めて關東の天台教院五百八十ヶ寺、悉く星野山に配屬する事となつたのである。後伏見天皇官園五十石を寄せ關天東台の本山と定め給ひ、後奈良天皇宸翰を染め給ひて星野山の勅額を下し賜はり法燈全山に耀いて崇敬からす、關東隨一の大靈場の名は適く知られたのである。

喜多院の稱號

天文七年北條氏綱の軍川越城に殺到し、全町悉く兵火の渦中に卷込むや、星野山も又紅蓮に包まれて一山灰燼に歸した。三寶の光こうに滅して爾來五十二年靈域は荒廢の極に達したが、後陽成天皇の天正十七年天海大僧正はこの靈場の荒蕪を痛嘆して再建の志あり、後水尾天皇の慶長十六年辛亥の歳自ら進んで東照公に之が再建を請ふた。その年の十一月東照公川越に於て放鷹の催しをなし、親

しく同寺に臨んで、四萬八千坪の地を境内と爲し、城主酒井忠利に命じて伽藍を再建せしめ、寺領五百石を寄せられた。後陽成天皇には又東叡山の勅額を賜はり佛藏院（北院）を改めて喜多院と爲し、門室に列せられたのである。

天海上人の興業

斯くして中興の祖天海上人當山に錫を留めて以來寺運益々隆昌に向ひ、殊に上人は黒衣の宰相として、徳川幕府に重きをなし、家康公又天海を崇敬する事深く、一山の興業に付いては巨額の資財を投じて、靈域の擴張に努むる所があつた。家康公と天海上人喜多院と徳川家、縁資は正に斯くの如く深甚なるものがあつたのである。寛永十五年祝融に災に遭つて關東に時めく靈山は三度炎上した、大猷つたのである。寛永十五年祝融に災に遭つて關東に時めく靈山は三度炎上した、大猷公大に駭き堀田加賀守正盛に命じて寺觀を復舊せしめ、更に江戸城内紅葉山の別殿を下附して天海師安息の所となし給ふ、現在の建物が即ち是である。嚴有公更に寺領二百石を加増し併せて七百五十石、法燈赫灼以て維新に及んだ。

星岳保勝會設立

春風秋雨三百年の歲月を閲して、由緒ある山内の大伽藍も漸く廢朽に傾き、佛法僧鳥の啼く聲あはれに、維新後靈域稍衰調を呈したのである。明

治四十年遠賀亮中師當院に來住するや、銳意寺門の復興を計り、明治四十四年中財閥は法人星岳保勝會を組織し、大隈伯爵を總裁に、濫澤男爵を會長に推戴して茲に始めて喜多院興隆の業を起した。亮中師専ら事に當り拮据黽勉近時漸く堂舎林泉殆んど舊觀を革め、面目を一新する事を得たのである。

境内の主なる名蹟

◎大師堂 兩大師を勸請せる靈堂は寛永十六年の建立に係り、間口十三間奥行九間の大殿堂は精美宏麗を極めてゐる。初め三代將軍家光公嗣子なきを憂ひ、天海大僧正に命じて祈願せしめた所が靈應空しからず、間もなく世子を授かり給ふたので欣喜斜めならず、御誕生の間を下賜せらるゝと共に當靈堂を建立せしめられた、中興の祖天海大僧正常に慈悲大師を信仰して降魔大師となし利益を四方に遍ねからしめ、永く大師に奉侍して離るゝ事なしと誓願した、世に所謂兩大師とは即ち慈悲大師及び慈眼大師の尊稱である。常に參詣者堵の如く境内は殷賑を呈してゐる。

◎開山堂 大師堂の南満山翠深い丘上にある間口三間奥行四間の堂宇で雨鏤霜刻の跡幽かに古雅な像を止めて居る。寶永二十年十月二日天海大僧正遷化し給ふや大猷公大師を追慕し給ひ生前刻する所の大僧正の塑像を此堂に安置せしめられた、刀法の妙致宛として生けるが如くである。慶安三年慈眼大師の諡號あるや堂名を慈眼堂と號し或は祖師堂とも云ふ。堂の正面にある樓門は鐘樓に摸し丹老りたる工致四邊に景趣を添へて居る。

◎記念塔 大師堂より客殿へ通する高欄の間を結んだ多寶塔で、寛永十六年酒井讃岐守忠勝の寄進する所、釋迦多寶の二佛を安置し元は二重の寶塔であつたが今は一重となし星岳保勝會の組織された記念堂となつてゐる。龍王門に模し外輪の丹塗が目立つて苑庭に美觀を呈して居る。

◎客殿 寺歴に留めて永く光榮の記念とする當院唯一の大建築である。即ち寛永十五年一山鳥有に歸するや大猷公は堀田加賀守正盛に命じて一院を悉く舊觀に復せしめ更に江戸城本丸紅葉山にありし別殿を賜つて天海大僧正安息の所となさしめた。

之は三代將軍誕生の御殿で誕生の間は上壇造り杉柁の合天井にて狩野探幽の揮毫に係る草花彩色の畫が壯麗を極めた奥書院である、次室は内佛で本尊の阿彌陀如來を安置し、室は總て十三疊半、總建坪四百坪に餘り庫裡も接續してゐる。

◎五百羅漢 大師堂の前庭東北隅に鐵垣を廻らし、十餘坪の淨域を劃して石像の三聖並びに五百の尊體を悉く網羅してある。享和年間澄音常藏祐賢の三法師發願建工する所のもので彫刻の巧緻なる眞に我が國有數の名羅漢である。

◎經藏 境域の南方青葉の陰に立てられた寶藏である、慶長十九年毛利輝元公靈場の再造を隨喜して傳來する宋板の一切經を天海僧正に贈つたので神君は直に經庫を建立して之を納めた、後三代將軍家光公足利板の一切經を寄せて共に經庫に納めたが寛永十五年一山炎上の際經藏の一字だけが僅かに其の災を免るゝ事が出来た、即ち現存するもので霜刻の跡幽かに三百年の歴史を物語つてゐる。

◎明星杉及明星井 境内百花園の北隅にある。往昔尊海僧正伏見天皇の命を奉じて當院再興の爲め東國に下り三芳野へ牛車を進めると一點の明星が叢草中より昇る

のを見て、即ちその靈地である事を知り堂宇を建立して星野山と號した、其の後天海大僧正も又此の地で明星天子の法を修して法燈の再輝を祈つた時に宛も十三日の曉一團の靈光が閃々としてその所より上るのを見た。明星井、明星杉は即ち靈地發見の瑞徴として古來名高く、今も尙方二坪の井は清泉をなして老杉に蔽はれ森嚴の域を形造つてゐる。

◎三位稻荷祠 三尺五寸に二尺五寸の小祠で、院内奥庭の西方に建立されてゐる。縁起を語る面白い説話がある、即ち喜多院第十四世實海師臨終に際し鈴を打ち振りながら安らかに上天して急も天狗となつた。其時所化に三位と云ふのがあつて味噌を摺つてゐたが己れも師の後を追つて上天せんと唾上より一躍すると忽ち落下して敢ない最期を遂げた、其の落下の地へ一祠を建て、此を祀る即ち三位稻荒で、今でも院内では摺子木を懸け、鈴を振る事が禁ぜられ、若し犯す時は三位が大蛇に化して出現するとの奇説が傳はつてゐる。

重なる寶物

—(76)—

[illegible]

比企郡松山町	第八十五銀行支店
大里郡熊谷町	同行支店
秩父郡大宮町	同行支店
兒玉郡本庄町	同行支店
北足立郡志木町	同行支店
入間郡南谷村橋	本三九郎

秋葉原川越町驛間
川越町池袋驛間
専用車積取扱



東上線川越町驛前

内國通運株式會社取引店

丸川運送店

電話川越(二六七番)

店主 綾部半次郎

埼玉縣川越町

畠 渡邊吉右衛門商店吳服部

電話 二六六番
振替口座(二、八七七番)

畠 渡邊吉右衛門商店卸部

電話 二六二番
振替口座(二、八七七番)

畠 渡邊吉右衛門商店洋服部

電話 二六二番
振替口座(二、八七七番)

畠 株式會社川越渡邊銀行

電話 二四一番
振替口座(二九〇番)

武藏川越町



株式會社 川越商業銀行

電話川越一六番

埼玉縣川越町

株式會社 黑須銀行川越支店

電話川越二六〇番

報道機敏
記事正確 中央新聞

材料豐富
趣味深き 埼玉版

川越連雀町

支局直營 中央新聞販賣所

配達は迅速勉強を專一と致候
浦和町

埼玉支局長 大綱最正

御料理

仕出し

川越本町

初音屋

電話川越三六番

牛
西洋御料理 吉 寅

川越町本町

電話川越一〇二番

川越志義町

蒲燒
御料理 谷 幸

小谷野喜太郎

電話川越一〇三番

▼入間川筋鮎漁の最好適地▲

□簡易にして清楚なる遊漁に適す

□方法は最も趣味ある瀬干瀬張引網等

田面澤

埼玉縣入間郡田面澤村

鮎

漁

字津木辰五郎

御案内

□天幕其他一切の設備あり團體歓迎す

□料金は低廉會社と協定左の如く定む
一網三圓乃至五圓、貸船一日二十錢

▼場所は田面澤驛僅に一丁▲

夏

の

沿道瀧の案内

▲白子不動の瀧

成増驛より五丁

▲氷川の瀧

膝折驛より十丁

▲不動の瀧

同驛より六丁

▲雲居の識(辨天瀧改め)

鶴瀬より六町

▲二子の瀧

新河岸驛より十丁

名

所

御料理

仕出し

川越南町

山屋

電話川越四八番

懇切丁寧

川越江戸町

今福屋

電話十七番

御旅館

室を潔
めて客
に對し
専念御
便利を
計り可
申候

東上鐵道川越町驛前
休憩所

今福屋
支店

客室美麗

内國通運株式會社取引店

通 膝折運送店

東上線膝折驛前

矢印小麥粉製造所

北口製粉
組合員

大畑省輔

埼玉縣北足立郡膝折村大字膝折

矢印小麥粉製造所

北口製粉
組合員

大畑榮一

埼玉縣北足立郡膝折村大字膝折

埼玉縣北足立郡膝折村

矢油理伸銅所

電信略號(ユリ)

金 屬 鍼 線 所

奧住第一販賣所

(埼玉縣北足立郡膝折村)

奧住第二販賣所

(東京府下北多摩郡保谷村)

奧住金兵衛

埼玉縣北足立郡膝折村

奧住販賣所

東京神田佐久間町四ノ二
電話 下谷一〇六番

金屬熔合展伸工作經營

鹽野工業所

電話 (シヨ)

埼玉縣北足立郡膝折村

埼玉縣北足立郡膝折村



株式會社 東京信用銀行

埼玉支店

内國通運株式會社引取店

東京山の手線池袋驛前

池袋運送店

電話番町一九七八番
電話〇ツ又は〇イケ

和洋酒、飲料水、煙草、新聞雜誌、
菓子、牛乳、瀛車時間表、其他旅
行用品各種販賣

池袋驛構内
販賣所 田中屋

田中藤太郎

東上線池袋驛前

旅客各位の御便宜相計可申候

清酒醬油味噌麥酒各種

粕取燒酎本直耐及洋酒一式

各種「サイダー」飲料水一式

牛肉海苔ミルク罐詰各種

練馬特産武藏野漬發賣元

下野酒造 釀造花正宗印 販賣元
株式會社

銘酒東自慢印 特約販賣

東上線上板橋驛西方二丁餘川越街道
府下北豐島郡上板橋村四五三二

日野屋號

梅澤兵藏商店

東京より起點池袋驛を経て所澤、飯能方面への最近道、沿道は武藏野の風光絶佳名所舊蹟に富み四季の遊覽に適す

武藏野鐵道株式會社

電話番町二八七〇番

池袋驛より山の手線にて新宿、上野方面に連絡し又山ノ手線大塚、巢鴨兩驛より市街電車に連絡致候

入間川砂利採取販賣

 印 醬油 釀造業

並 並木萬次郎

東上線成増驛前
東京府下北豊島那赤塚村

東上線上板橋驛前

休憩所
飲食店 小女屋

相原

上板橋停車場構内

休憩所 こみや

今を去る四百有餘年前
文龜元年己月良辰

賢榮阿闍梨御開創

大正四年三月廿一日發見

穴守辨財天
〔毎月三日緣日〕
廿一日

東上線 上板橋停車場より西南七丁

府下北豊島郡下練馬村

慧日山圓明院

涼味溢るゝ

川魚の割烹は沿道隨一
白子不動の瀧にて有名なる

御料理
旅館
龜清

(成増驛西北五丁)



龜清の庭園

熊野神社々前にあり四季折々の
眺望絶佳閑雅なる清宴に適せり

宮内省御用達
土木建築請負
並に砂利採取販賣

(本宅) 埼玉縣南埼玉郡越ヶ谷町九〇五

遠藤組 遠藤彌市

(電話越ヶ谷七番)

出張所 栃木縣足利郡山邊村字田中(電話足利六四七番)

販賣所 東上線田面澤驛前、東武線足利驛前、同佐野停車場前

◎運送業 ◎倉庫業

◎荷爲替 ◎委托販賣

内國通運株式會社取引店

井下田運送店

本店 埼玉縣北足立郡志木町

支店 東上線志木驛前

店主 井下田慶十郎

御料理
旅館 角萬

志木町

和洋御料理
旅館 伊勢周

志木町

川魚御料理
旅館 たなかや

志木町

海陸産肥料鹽元賣捌薪炭商

本店 内田常太郎

埼玉縣入間郡仙波村大字岸三十一番地 電話(ウチタ)或ハ(ツ)

内國通運株式會社取引店

通 内田運送部

東上線新河岸驛前
電話(ウチタ)或(ツ)

東上鐵道貨物特定取扱店

常 内田運送部出張所

東上線川越西町驛前
電話(ウチタ)或(ツ)

各地狩獵案内

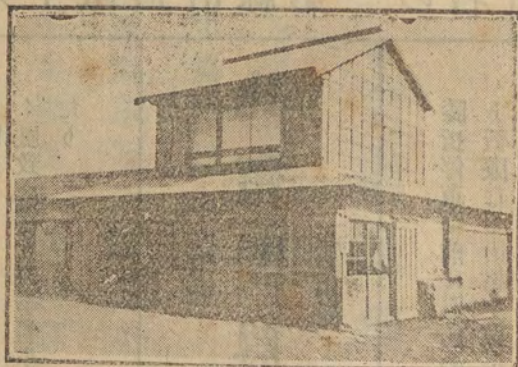
獵犬養成の需に應ず

埼玉縣入間郡川越在高階村
東上線新河岸驛より東八丁

藏持泰三

(案内料其他詳細は問
合に依り回答可仕候)

(入間川の砂利は良質且低廉)



(コンクリート用に最も適す)

土木建築測量設計
砂利採取販賣

東上線田面澤驛前

川越砂利商會

小 松田運送店

電話(マルコ)

松田嘉重

府下板橋町

出張販賣店 花井源兵衛

東上鐵道沿線第一の名所

數町歩に亘る農園は眺望佳
く風致に富み四季名花爛熳
たり

比留間農園

(膝折驛より五丁)

膝折停車場前に賣店の設あ
り低廉なる價格を以て花卉
を即賣す

運輸百般業務確實機敏に御取扱可仕候

東上線成増驛前

八王子中牛馬支店

＊河内運送店

電 略 (チ ヅ)
振替東京二九二四番

東上線上板橋驛前

八王子中牛馬支店

内國通運會社取扱店

通 川口運送店

名所案内の調査編纂引受!!!

交通機關の向上發達に資する目的を以て設立せる
本協會は事業の一部として各鐵道沿線の名所舊蹟
遊覽地等の調査及び之が案内記の編纂發行を引受
け申候御一報次第如何なる遠隔の地と雖も直に協
會員出張御相談申すべく候

東京府巢鴨町千百九番地

大日本交通協會

東

數町歩に亘る農園は眺望佳

運輸百般業務確實機敏に御取扱可土侯

大正四年八月七日印刷
大正四年八月十日發行

特價貳拾五錢

著作者兼
發行者

山田勇雄

東京府北豐島郡巢鴨町千百九番地

印刷者

川崎佐吉

東京市京橋區築地二丁目三十番地

東上鐵道案內

不許複製

東京市京橋區築地二丁目三十番地

印刷所

川崎活版所

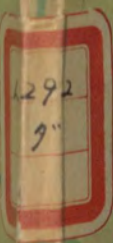
發行所

東京府北豐島郡
巢鴨千百九番地

大日本交通協會

東豆織道案内

東豆織道案内



埼玉県立図書館



31020931